

# 八調経卷1

## 1～4調

### スボタ晩 課

首唱聖詠、大連禱

カフィズマ（悪人の謀、小連禱）全文誦読

### 1 調

「主よ爾によぶ」に八句を立てて。自調の讃頌 第一調

主や汝によぶすみやかに我れにいたりたまえ 主や  
 われに聞きたま え 主や汝に呼ぶすみやかに我れに  
 いたりたまえ 汝に呼ぶときわが祈りの声をいれたま え  
 主やわれに聞きたま え ねがわくはわがいのりは  
 香炉かまどのかおりのごとく 汝がかはんばせのまえにのほり  
 わが手をあぐるはくれの祭のごとくいれられん主や  
 われにききたま え

晩課の聖詠 140, 141, 129, 116 聖詠の読み（省略）

聖詠「主よ、我が口に衛を置き・・・彼等は我より強ければなり。」まで省略

句、我がわ霊たましいをひとや獄ひより引き出して、我われに爾なんじの名なを讃さんえい榮たませしめ給へ。

聖せいなる主しゅよ、我が晩わの禱くれを納いのりれて、我等われらに罪つみの赦ゆるしを興あたへ給へ、爾なんじは獨ひとり世界せかいに復活ふっかつを顯あらわしし者ものなれば

なり。

句、爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん

ひとびと めぐ これ かこ こ うち ふっかつ しゅ こうえい き かれ われら ふほう すく  
人人よ、シオンを廻り、之を圍みて、是の中より復活せし主に光榮を歸せよ、彼は我等を不法より救ひ  
わ かみ  
し吾が神なればなり。

句、主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

ひとびと きた うた おが その し ふっかつ さんえい かれ てき いざない せかい すく  
人人よ、來れ、歌ひてハリストスを拜み、其死より復活せしを讚榮せん、彼は敵の誘惑より世界を救ひ  
わ かみ  
し吾が神なればなり。

スティヒラ バトリアルフ  
又讚頌、總主教アナトリイの作、第一調。

句、願はくは爾の耳は我が棒の聲を聴き納れん。

しよてん たの ち もとい ラッパ ふ しよざん よるこ よ けだしみ われら つみ  
諸天は樂しめ、地の基は角を吹け、諸山は歡びて呼べ、蓋視よ、エムヌイルは我等の罪  
じゅうじか てい いのち たま ふっかつ もの し ころ ひと しゅ  
を十字架に釘せり、生を賜ひ、アダムを復活せしめし者は死を殺せり、人を愛する主なればなり。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

あまん われら ため み じゅうじか てい くるしみ う ほうむ し より ふっかつ しゅ うた  
甘じて我等の爲に身にて十字架に釘せられ、苦を受け、葬られ、死より復活せし主を歌ひ  
い て曰はん、ハリストスよ、せいきょう もつ なんじ きょうかい かた われら いのち へいあん たま なんじ  
は仁慈にして人を愛する主なればなり。

句、我主を望み、我が靈主を望み我彼の言を待む。

わ かみ われらふとう もの いのち こ なんじ はか まえ た たち なんじ い がた じれん  
ハリストス我が神よ、我等不當なる者は生命を籠むる爾の墓の前に立ちて、爾の言ひ難き慈憐  
さんえい たてまつ けだしなんじ つみ もの せかい ふっかつ たま ため じゅうじか し う たま  
に讚榮を奉る。蓋爾は罪なき者よ、世界に復活を賜わん爲に、十字架と死とを受け給へ  
ひと あい しゅ  
り、人を愛する主なればなり。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

ちち どうむげんどうえいざい ことば い がた どうていじよ たい い われら ため あまん じゅうじか し  
父と同無原同永在なる言、言ひ難く童貞女の胎より出でて、我等の爲に甘じて十字架と死と  
う こうえい うち ふっかつ もの うた い いのち たま しゅ わ たましい きゅうしゃ こうえい  
を受け、光榮の中に復活せし者を歌ひて曰はん、生命を賜ふ主、我が靈の救者よ、光榮  
なんじ き  
は爾に歸す。

スティヒラ ミネヤ  
他の讚頌、至聖なる生神女に捧ぐ、アモレイのパワエルの作、月課經の讚頌の無き所、或は「リティヤ」に歌ふ所の者。

スティヒラ  
讚頌、第一調。

句、願はくはイズライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

せい しゅうぐん せい いっさい ぞうぶつ とうと しょうしんじよ せかい じよさい きゅうせいしゅ う もの  
聖なる衆軍より聖にして一切の造物より尊き生神女、世界の女宰、救世主を生みし者  
よ、なんじ きとう もつ われら もるもる つみ やまい わざわい すく たま  
よ、爾の祈禱を以て我等を諸の罪と疾病と災禍より救ひ給へ。

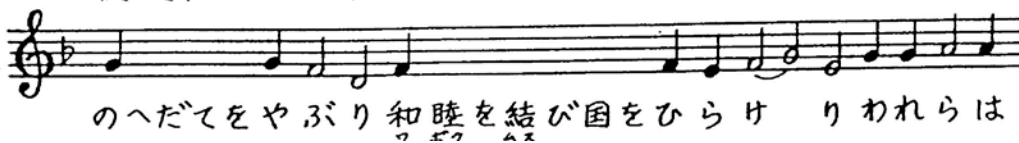
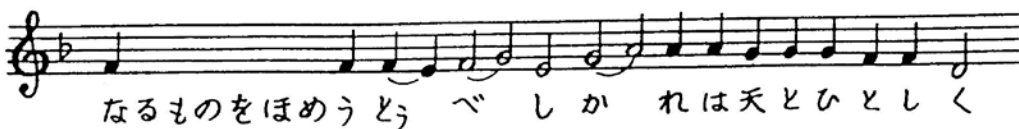
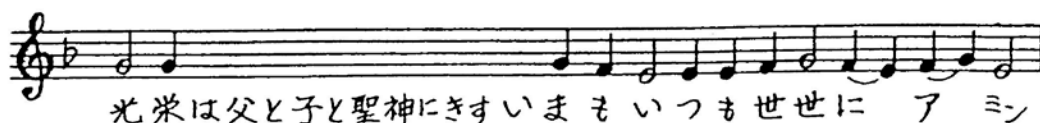
句、<sup>ばんみん</sup>萬民よ、<sup>しゅ ほめ あ</sup>主を讃め揚げよ、<sup>ばんぞく</sup>萬族よ、<sup>かれ あが ほ</sup>彼を崇め讃めよ。

<sup>じれん もん</sup>慈憐の門なる<sup>しょうじよ</sup>少女よ、<sup>せつ なんじ いの</sup>切に爾に祈る、<sup>わ ひび たましい す</sup>我が卑微なる靈を棄つるなく、<sup>すみやか あわれみ た</sup>速に憐を垂れ  
<sup>これ わ</sup>て、<sup>しよざい ふち すく たま</sup>之を我が諸罪の淵より救ひ給へ。<sup>いさぎよ どうていじよ なんじ おんちよう あらた</sup>潔き童貞女よ、爾の恩寵を新にして、<sup>われ うえ</sup>我の上  
<sup>かがや たま</sup>に輝かし給へ。

句、<sup>けだしかれ われら ほどこ あわれみ おおい</sup>蓋彼が我等に施す憐は大なり、<sup>しゅ しんじつ なが そん</sup>主の眞實は永く存す。

<sup>じよさい なんじ かみ ひとびと あわ たま</sup>女宰よ、爾は神を人人に合せ給へり、<sup>なんじ ひとりし ぞく せい しんせい ふきゆう のぼ</sup>爾は獨死に屬する性を神聖なる不朽に升せた  
<sup>なんじ ちじよう もの すくい なが たま</sup>り。爾は地上の者に救を流し給へり。爾、<sup>なんじ しょうしんじよ われら もるもろ くだん のが たま</sup>生神女よ、我等を諸の苦難より脱れしめ給  
へ。

【生神女讃詞】



かれを信シンの固カクめとなし彼カより生ナれし主ヌシをふせフぎまもるもの  
 とな すいスイさめよ 神カミの民タミやいイさめよ主ヌシはてき  
 にかたカタん全ゼン能ネ者シャなればなり

→通常部分 (P6【聖にして福たる】へ戻る

【スポタのポロキメン】(6調)

【重連禱】

誦経 「主や我等を守り」

【増連禱】

(増連禱が終わったら)

# 1 調 挿句のスティヒラ

## ☆挿句のスティヒラ 主日 第一調。

ハリストスよ、爾なんじの苦くるしみにて我等われらは苦くるしみを免まぬかれ、爾なんじの復活ふっかつにて我等われらは淪滅ほろびより救すくはれたり。主しゅよ、光榮こうえい  
 は爾なんじに歸きす。

又讚頌

句、主しゅは王おうたり、彼かれは威嚴いげんを衣きたり。

造物ぞうぶつは喜よろこぶべし、諸天しよてんは樂たのしむべし、諸民しよみんは樂たのしみて手てを拍うつべし。蓋けだし吾わがが救世主きゆうせいしゅハリストスは我等われら  
 の罪つみを十字架じゆうじかに釘ていし、死しを殺ころして、我等われらに生いのちを賜たまひ、萬族ばんぞくの原祖げんそたる 陥おちいりシアダムを復活ふっかつせしめ給たまへ

り、人ひとを愛あいする主しゅなればなり、

句、故ゆえに世界せかいは堅固けんごにして動うごかざらん。

悟さとり難がたき主しゅよ、爾なんじは天地てんちの王おうにして、仁愛じんあいに因よりて甘あまじて十字架じゆうじかに釘ていせられたり。地獄じごくは下しもに爾なんじを迎むかへ  
 て哀かなしみ、義人等ぎじんらの靈たましいは爾なんじを接うけて喜よろこび、アダムは爾なんじ造成ぞうせい主しゅを最下いとしもなる處ところに見みて復活ふっかつせり。嗚呼ああ奇蹟きせき

ぼんゆう いのち いかん し な こ せかい てら ほつ ゆえ これ よ せかい よ い  
や、萬有の生命は如何ぞ死を嘗めたる、是れ世界を照さんと欲せし故なり。此に由りて世界は呼びて云  
ふ、死より復活せし主よ、光榮は爾に歸す。

しゅ せいとく なんじ いえ ぞく えいえん いた  
句、主よ、聖徳は爾の家に屬して永遠に至らん。

けいこうじょ こうりょう たずさ いそ かつ な なんじ はか いた なんじ しじょう たい え てんし よ  
攜香女は香料を攜へ、急ぎ且哭きて爾の墓に至りしに、爾の至浄なる體を得ずして、天使に因り  
て新しき至榮なる奇蹟を知りて、使徒等に謂へり、世界に大なる憐を賜ふ主は復活し給へり。

### 「光榮、今も、」 生神女讃詞

み よげん かな どうていじょ こ う う のち う まえ ごと どうていじょ うま もの かみ  
視よ、イサイヤの預言應ひて、童貞女は子を生めり、生みし後も生む前の如く童貞女なり、生れし者は神  
なるに因る、故に天性は改め易へられたり。嗚呼神の母よ、爾の諸僕が爾の堂に獻ぐる祈祷を棄つる勿  
れ恵深き主を爾の手に抱きし者として、爾の諸僕を憐みて、我等の靈の救はれんことを祈り給へ。

→通常部分 P10「シメオンの祝文」へ戻る

### 「聖三祝文」「至聖三者」「天主經」

司祭 げだし 蓋 国と権能と光榮は爾父と子と聖神<sup>o</sup>に歸す、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

「生神童貞女や、慶べよ」

「願わくは主の名は崇めほめられ……」

## 主日早 課

来たれ…、【六段の聖詠】【大連禱】に続いて

<カフィズマ、セダレンは省略>

# 1 調

## 主は神なり、主日トロパリ

主は神なり我等を照せり、主の名に依りて来る者は崇め讃めらる、

(第1句) 主を尊み讃めよ、彼は仁慈にして其憐は世世にあればなり、

(第2句) 彼等我を囲み我を環れども、我主の名を以て之を敗れり、

(第3句) 我死せず、猶生きて主の行ふ所を伝へん、

(第4句) 工師が棄てし所の石は屋隅の首石となれり、是主のなす所にして我等の目に奇異なりとす、



主はかみなりわれらをてらせり主の名によって来た

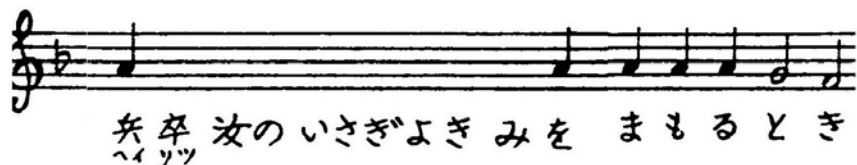


るものはあがめほめらる

1 調 主日トバリ



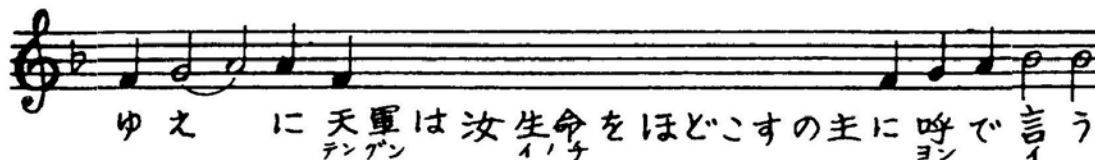
きうせい、主や イウデマ の人はかをふりて



兵卒 汝のいさぎよきみを まもるとき  
ヘイッ



なんじは 三日目 にふくかつして世界に生命をたまえり  
ミツ カメ イ、チ



ゆえに 天軍 は汝生命をほどこすの主に呼で言う  
テンゲン イ、チ ヨン イ



光えや光栄は汝の復活に帰し光えいはなんじの  
ヒトス ヤ コク



くにに帰すひとり人をいつくしむの主や光えいは



なんじのおもんばかりに帰す

→通常部分 P15 【ポリエレイ】「主の名を讃め揚げよ」

<ポリエレイ後のセダレン、ネポロチニ省略>

【復活のエフロギタリア】「主や爾は崇め讃める」

# 1 調

【アンティフォン】

## ☆品第詞。第一倡和詞、第一調。

わ うれい とき われ なげき き たま しゅ われなんじ よ の お むな よ ほか あ もの つね しんせい  
我が憂の時、私の痛歎を聴き給へ、主よ、我爾に呼ぶ。野に居りて虚しき世の外に在る者には恒に神聖  
のぞみ  
なる望あり。

光榮、今も

せいしん ちちおよ こ ひと そんけい こうえい かな ゆえ われら どういつけんのうち せいさんしゃ うた  
聖神には父及び子と均しき尊敬と光榮とは適ふ。故に我等同一権能の聖三者を歌はん。

<以下省略> (今も、同上。)

### 第二倡和詞

かみ なんじ われ なんじ りつぽう やま のぼ しよとく われ かざ たま わ なんじ うた ため  
神よ、爾は我を爾の律法の山に登せたり。諸徳にて我を飾り給へ、我が爾を歌はん爲なり。  
ことば なんじ みぎ て われ と われ おお われ まも たま つみ ひ われ や ため  
言よ、爾の右の手に我を取りて、我を蔭ひ、我を守り給へ、罪の火が我を焚かざらん爲なり。

光榮

せいしん よ およそ ぞうぶつ あらた またはじめ さま かえ ちちおよ ことば ひと ゆうのう  
聖神に因りて凡の造物は新にせられて、復初の状に還る、父及び言と均しく有能なればなり。

今も、同上。

### 第三倡和詞

ひとわれ わか ひて しゅ いえ ゆ かん と 云ふ時、わがしん たのしみ、こころ とも よろこぶ。  
人我に向ひて、主の家に向かんと云ふ時、我が神は楽しみ、心も共に喜ぶ。

いえ おおい おそれ けだし かしこ ほうぎ た ちじょう ばんぞくばんみん しんばん  
ダビドの家には大なる畏懼あり、蓋彼處に寶座は立てられて、地上の萬族萬民は審判せられ  
ん。

光榮

せいしん ちちおよ こ ひと そんけい ふくはい こうえい けんべい き どうぜん けだしせいさんしゃ せい ゆいいち  
聖神には父及び子と均しき尊敬、伏拜、光榮、權柄を歸すること當然なり、蓋聖三者は性にて惟一  
なり、唯位にては然らず。

今も、同上。

## ☆提綱、第一調

しゅいわ われいま お とら もの あやう ところ お しゅ ことば きよ ことば  
主曰く、我今興き、執へられんとする者を危からざる處に置かん。句、主の言は淨き言なり。

Zm 1gl

主いわく 我今 起き 執らえられんとする者を

危うかざるところに 置かん

→通常部分 P20

【福音の読み】

【福音後のスティヒラ】「ハリストスの復活を見て」

輔祭 「神よ爾の大なる憐れみによって」「主憐れめよ」12回

# 1 調 カノン

主日の規程、第一調。〈第1のカノン(復活)のみ、第2(十字架復活)、第3(生神女)は省略〉

第一歌頌

イルモス、死せざる主よ、勝を獲る爾の右の手は、神に適ふが如く、能力にて光榮を顯せり、其全能なるに因りて、敵を滅し、イ  
ズライリ人の爲に新なる深水の路を開きたればなり。(楽譜は下)

死せざるの主や汝の勝のみ ぎの手は かみに  
 かの がごと くちからにて榮をあらわせりその  
 全能なるによって てきをほろぼし イズライリ人  
 のために 新たなる深水の路を開きたまえばなり

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

はじめ しじょう て かみ ちから もつ われ つち つく しゅ じゅうじか て の どうていじょ と  
元始に至浄なる手にて神の力を以て我を土より作りし主は、十字架に手を伸べて、童貞女より取り  
わ く やす み つち よ おこ  
し我が朽ち易き身を土より喚び起せり。三次。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

しんせい いき もつ われ たましい い しゅ わ たため ころ たましい し わた われ えいえん くさり と  
神聖なる吹嘘を以て我に 靈 を入れし主は、我が爲に殺され、 靈 を死に付して、我を永遠の鎖より解  
おのれ とも ふっかつ ふきゆう さかえ たま  
き、己と偕に復活せしめて、不朽の榮を賜へり。

光榮、今も、生神女讃詞。



おんちよう いずみ よろこ てん かけはし もん よろこ どうだい こがね つぼ およ き やま いのち たま  
 恩寵の泉よ、慶べ、天の梯と門よ、慶べ、燈臺と金の壺、及び截られざる山、生命を賜ふハリス  
 トスを世界の爲に生みし者よ、慶べ。

又十字架復活の規程 (省略)

### 第三歌頌

イルモス、獨人の性の弱きを知りて、憐を以て之を衣たる者よ、我に上よりの力を帯びて、爾に呼ばしめ給へ、人を慈む主よ、爾の言ひ難き光榮の生ける宮は聖なり。(楽譜は下)

ひとりひとの性のよわきを知ってあわれみを以て  
 これを衣たるものやわれに上よりのちからをおびて汝  
 に呼ばしめたまえ人をいつくしむの主やなんじは  
 言いがたき汝の光榮の聖にしていけるみやなり

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

じんじ しゅ なんじ われ かみ おちい もの あわれ あまん われ くだ じゅうじか てい もつ われ  
 仁慈なる主よ、爾は我の神にして、陥りし者を憐みて、甘じて我に降り、十字架に釘せらるるを以て我  
 のぼ なんじ よ たま ひと いつくし しゅ なんじ い がた こうえい い みや せい  
 を升せて、爾に呼ばしめ給ふ、人を慈む主よ、爾の言ひ難き光榮の生ける宮は聖なり。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

ほんげん いのち しゅざい なんじ じれん かみ しゅざい われく もの き し ぞく ちり くだ  
 本原の生命たる主宰ハリストスよ、爾は慈憐なる神にして、我朽ちたる者を衣、死に屬する塵に下り  
 し けん ほろぼ みっかめ し ふっかつ われく き たま  
 て、死の權を滅し、三日目に死より復活して、我に朽ちざるを衣せ給へり。

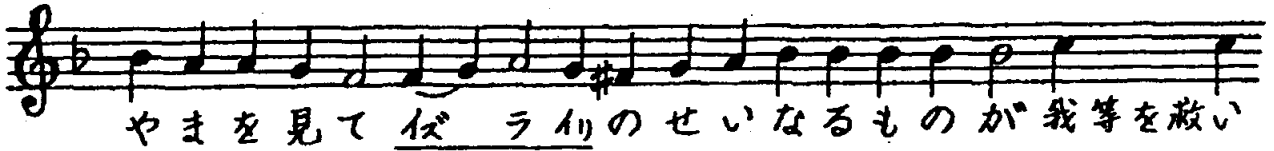
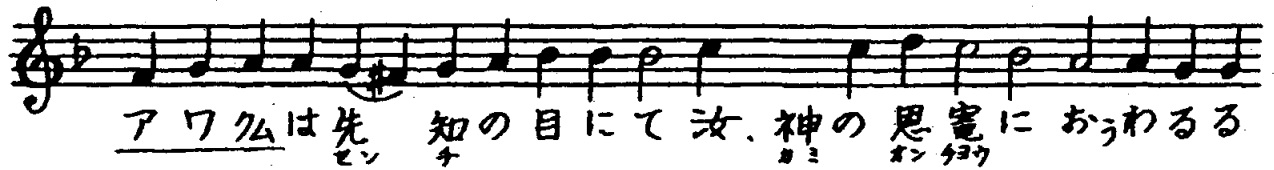
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン

### 生神女讃詞

どうていじよ なんじ しせいしん よ かみ ほん けだしりっぽうしゃ あらわ いばら  
 童貞女よ、爾は至聖神に因りて神を孕みて、焼かれざる者と止まれり、蓋立法者モイセイに顯れし棘  
 なんじた がた ひ う もの も や あきらか ぜんちよう  
 は爾堪へ難き火を受けし者の燃えて焼かれざるを明に前兆せり。

### 第四歌頌

イルモス、アウワクムは先知の目にて爾、神の恩寵に覆はるる山を見て、イスライリの聖なる者が我等を救ひ改めん爲に、爾より出づるを預言せり。(楽譜は次のページ)



附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

斯の救主、エドムより出で、棘の冠を冠り、血に染みたる衣を衣、木に懸かれる者は誰ぞ、是れイ  
ズライリの聖なる者、我等を救ひ改むる主なり。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

頑しき人人よ、視て愧べし、蓋爾等が無智に因りてピラトの命を乞ひて、犯罪者として十字架に懸け  
し者は死の力を破りて、神に適ふが如く墓より復活せり。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン

### 生神女讃詞

童貞女よ、我等爾が生命の樹なるを識る、蓋爾より生ぜし者は人の死を致す果に非ず、乃永き生命  
の樂にして、爾を歌ふ我等を救ふ者なり。

### 第五歌頌

イルモス、己の降臨の光にて世界の極を照し、己の十字架にて之を輝かししハリストスよ、爾が智慧の光  
にて正しく爾を歌ふ者の心を照し給へ。(楽譜は次のページ)





附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

イウデヤ人は大なる羊の牧者及び主を十字架の木にて殺したれども、彼は地獄に葬られたる死者を羊の如く死の權より救ひ給へり。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

ハリストス吾が救世主よ、爾は十字架にて和睦を福音し、虜に赦を傳へ、權ある者を辱かしめ、爾の神聖なる復活を以て其裸體にして貧しくなりたるを顯し給へり。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン

生神女讃詞

讃美たるものよ、切に爾に求むる者の禱を斥くる母れ。至淨なる者よ、之を受けて、爾の子なる神、一の恩主に捧げ給へ、我等爾を轉達者として得たればなり。

第六歌頌

イルモス、今を限の淵はわれらをかこめりのがれしむるものなし、我等は屠所の羊の如し。吾が神よ、爾の民を救へ、爾は弱る者の力と更新なればなり。



附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

主しゅハリストスよ、我等われらは始めて造られし者ものの 愆あやまち にて痛く傷つけられ、爾いたが我等きずの爲なんじに受けし傷われらにて愈ためされたり、爾うは弱きずる者いやの力なんじと更新よわなればなり。

**附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。**

全能ぜんのうの主しゅよ、爾なんじは己おのれの權けんにて衆しゅうを吞む鯨のの力くじらを破り、之やぶを殺して、我等これを地獄ころより引き上げたり、爾われらは生命じごくと光ひと復活あなればなり。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン

**生神女讃詞**

至淨しじょうなる童貞どうてい女じよよ、我が族わの原祖げんそは罪つみに因りて失うしなひしエデムを爾なんじに因りて復また之これを得て、爾なんじの爲ために樂たのしむ、爾なんじは産さんの前まえにも産さんの後のちにも潔いさぎよき者ものなればなり。

◇小連禱

**小讃詞、第一調。**

主宰しゅさいよ、爾なんじは神かみなるに因りて光榮こうえいの中に墓うちより復活はかし、世界せかいをも共に復活ともせしめ給たまへり。人ひとの性せいは爾なんじを神かみとして讀ほめ歌うたひ、死しは滅ほろぼされ、アダムたのは樂いましみ、エワいまは今な縛なりて釋なりて、歡よろこびて呼よぶ、ハリストスよ、爾なんじは衆人しゅうじんに復活ふっかつを賜たまふ主しゅなり。

<同讃詞 省略>

**第七歌頌**

イルモス、生神女しんしんじよよ、我等われら信者しんしやは爾なんじを見て屬神じくしんの爐いろと爲す、蓋なほ先祖せんぞの尊たうとまれて崇あがめ讃ほめめらるる神かみは、三人さんにんの少者せうしやを救すくひし如ごとく、斯ごとく爾なんじの腹はらに於て全世界ぜんせかいを改あらため給へり。

生神女しんしんじよやわれら信者しんしやはなんじをみてたましい  
あるいろりとなす尊たうととまるるものが三人さんにんの少者せうしやを

すくえるごとく先祖のあがめほめらるる  
 かみはなんじのほらにおいて金世かいをあらた  
 めたまえばなり

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

ち おそ ひ かく ひかり くら でん しんせい まく さ いし くだ ぎ もの せんぞ とうと  
 地は畏れ、日は隠れ、光は暗み、殿の神聖なる幔は裂け、石は砕けたり、義なる者にして、先祖の尊  
 あが ほ かみ じゅうじか かか たま  
 まれて崇め讃めらるる神が十字架に懸り給へばなり。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

なんじ たすけ もの ごと あまん われら ため きず し わた よろず もの と けんとう  
 爾は援助なき者の如くなりて、甘じて我等の爲に傷づけられ、死に付されたれども、萬の者を釋き、權能  
 て もつ おのれ とも ふっかつ たま せんぞ とうと あが ほ かみ  
 の手を以て己と偕に復活せしめ給へり、先祖の尊まれて崇め讃めらるる神なればなり。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン

生神女讃詞

じょうせい みず いずみ よろこ たのしみ てんどう よろこ しんじや かき よろこ こんいん あずか もの よろこ ぜん  
 常生の水の泉よ、慶べ、樂の天堂よ、慶べ、信者の垣よ、慶べ、婚姻に與らざる者よ、慶べ、全  
 せかい よろこび よろこ せんぞ あが ほ かみ なんじ よ われら かがや  
 世界の歡喜よ、慶べ、先祖の崇め讃めらるる神が爾に依りて我等に輝きたればなり。

第八歌頌

イルモス、イズライリの少者は爐に在りて、坩堝に在るが如く、敬虔の美しきを以て黄金よりも明に輝き  
 い しゅ ことごと ぞうぶつ しゅ あが ぼ うた ばんがい ぼ あ  
 て云へり、主の悉くの造物は主を崇め讃め、歌ひて萬世に讃め揚げよ。(楽譜は次ページ)

イズライリの少者はいろりにあつてつぼにある  
 がごとく敬虔のうるわしきにてこがねよりも  
 あきらかにかがやきていえり主のことごとくのぞう



附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

己の旨に循ひて萬物を造り、又之を變化し、己の苦にて死の蔭を易へて永遠の生命と爲す神の言  
よ、我等悉くの造物は絶えず爾を主として歌ひて、萬世に讃め揚ぐ。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

ハリストスよ、爾は地獄の門及び其防固の中に哀と苦とを滅して、三日目に墓より復活し給へ  
り。悉くの造物は絶えず爾を主として歌ひて、萬世に讃め揚ぐ。

父と子と聖神の一なる神を讃め揚げん、今も何時も世々にアミン

生神女讃詞

種なくして性に超えて神聖なる輝に由りて最貴き眞珠なるハリストスを生みし者を歌ひて呼ばん、主  
の悉くの造物は主を崇め讃め、歌ひて萬世に讃め揚げよ。

◇【生神女の歌】を歌う、(復活祭期、大祭日には歌わない。代わりに祭日の附唱)

我が心は主を崇め、我が霊は神我が救主を悦ぶ。

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え、貞操を破らずに神ことばを生み師し  
実の生神女たる爾を崇め讃む。

第2句 その婢の卑しきを顧み給へり、今より萬世我を福なりと言はん、

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え……

第3句 権能を持ち給へるものは、我が為に大なる事を為せり、

其の名は聖なり、其の憐れみは世世 彼を畏るる者に臨まん

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え……

第4句 其の肘の力を表して、心の驕れるものを散らし給へり、

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え……

第5句 権ある者を位より斥け、卑しき者を上げ、飢うる者を善に飽かせ、富める者をむなしく帰らせ  
給へり。

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え……

第6句 其の僕、イズライリを納れて、我が先祖に告げしが如く、

アウラムと其の裔を世世に憐れむ事を記憶し給へり、

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え……

第九歌頌

イルモス、<sup>しょうしんじょ</sup>生神女よ、<sup>も</sup>燃ゆれども<sup>や</sup>焼かれぬ<sup>いばら</sup>棘は爾が<sup>いさぎよ</sup>潔き<sup>さん</sup>産の<sup>かたち</sup>象を<sup>あらわ</sup>顯せり。祈る、<sup>いの</sup>今も<sup>いま</sup>我等を<sup>われら</sup>攻め<sup>せ</sup>圍<sup>かこ</sup>む<sup>いざない</sup>誘惑の<sup>いろり</sup>爐を<sup>う</sup>撲ち<sup>け</sup>滅して、<sup>つね</sup>常に<sup>なんじ</sup>爾を<sup>あが</sup>崇め<sup>たま</sup>させ給へ。(楽譜は次ページ)

生 神 女 や も ゆ れ ど も 焼 か れ ぬ い ば ら は  
 汝 が い さ ぎ よ き 産 の 形 を あ ら わ せ り 祈 る 今 も わ れ ら  
 を せ め か こ む い ざ な い の い ろ り を う ち け し て  
 つ ね に 汝 を あ が む る を い た さ せ た ま え

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

あ あ ふ ほう ふ じ ゅ ん た み なん あ は か ふ ぎ ふ けん も の ぎ な ぎ こう え い し ゅ き か  
 嗚呼不法不順の民よ、何ぞ悪しきを謀りて、不義不虔の者を義と爲し、義なる光榮の主を木に懸けんこ  
 とを定めたる。我等宜しきに合ひて彼を崇め讃む。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

き ゅ う せ い し ゅ よ つ み に な き ず こ ひ つ じ わ れ ら なん じ み つ か め ふ っ か つ も の ち ち お よ なん じ し ん せ い し ん と も さん え い  
 救世主、世の罪を任ひし玷なき 羔よ、我等爾三日目に復活せし者を父及び爾の神聖なる神と偕に讃榮  
 し、光榮の主と傳へて崇め讃む。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン

生神女讃詞

ひ と あ い し ゅ なん じ と う と ち え なん じ た み す く こう て い て き た い ち から た ま なん じ し ゅ き ょう かい  
 人を愛する主よ、爾の尊き血にて得たる爾の民を救ひ、皇帝に敵に對して能力を賜ひ、爾の諸教會  
 へい あ ん あ た た ま しょう しん じょ き と う よ  
 に平安を與へ給へ、生神女の祈祷に因りてなり。

→通常部分へ戻る P29

◇ 小聯禱

「主我等の神は聖なり」

【差遣詞】

# 1 調

## 【讃揚歌とスティヒラ】

【凡そ呼吸ある者】に六句を立てて

およそ いきあるものは主をほめあげよ 天より主  
をほめあげよ いとたかきにかれをほめあげよ  
ほめ歌は汝かみにぎす そのことごとくの神使や  
かれをほめあげよ そのことごとくの翼やかれをほめあ  
げよ ほめ歌は汝かみに帰す

→通常部分 P31 に戻る 【大頌栄】を歌う

【定規のトロパリ】

【重連禱、増連禱】 早課の終わり。発放詞。

## 一時課

<一時課の変更箇所は、トロパリ、コンダクのみ>



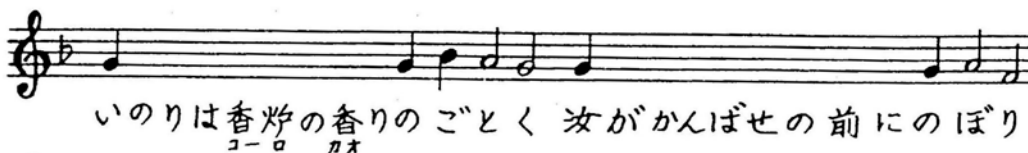
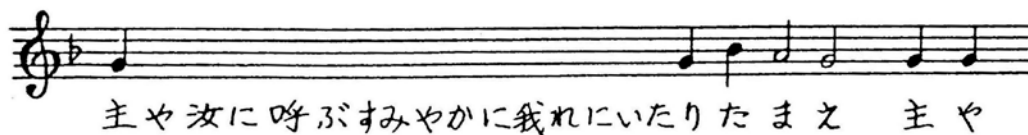
# スボタ晩 課

【首唱(103)聖詠】「我が靈や」、【大連禱】

【カフィズマ】第一段「悪人の謀」歌う、

【小連禱】

## 2 調



主日の讚頌、第二調。

句、我が靈たましいを獄ひとやより引き出して、我われに爾なんじの名なを讚さんえい榮えいせしめ給へ。

きたりて、世よの無なき先ききに父ちちより生うまれし神かみの言ことば、童どう貞てい女じよマリヤより身みを取りし者ものに伏ふく拜はいせん。蓋けだし彼かれは親みづから望のぞ

みし如ごとく、十じゅう字じ架かを忍しのびて、葬ほうわりに付わたされたり、死しより復ふく活かつして、我われ迷まよへる人ひとを救すくひ給へり。

句、爾なんじ恩おんを我われに賜たまはん時とき、義ぎ人じんは我われを環めぐらん。

ハリストス吾が救世主は我等を罪する書券を十字架に釘うちて之を抹し、死の權を空しくし給へり。我等  
其三日目の復活に伏拜す。

句、主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

我等は天使首と共にハリストスの復活を讃め歌はん。蓋彼は我等の靈の贖罪主及び救世主なり、且畏  
るべき光榮と勁き能力とを以て還來りて、其造りし世界を審判せん。

又讚頌、アナトリイの作。同調。

句、願はくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

天使は爾十字架に釘せられて葬られたる主宰を傳へて、女等に言へり、來りて、主の臥したる處を觀  
よ、蓋彼は言ひし如く復活せり、全能者なればなり。故に我等爾惟一不死の者に伏拜す。生命を賜ふハ  
リストスよ、我等を憐み給へ。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬ま  
ん爲なり。

爾の十字架にて木に縁る詛を空しくし、爾の葬にて死の權を滅し、爾の復活にて人類を照し給へ  
り。故に我等爾に籲ふ恩主ハリストス吾が神よ、光榮は爾に歸す。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を侍む。

主よ、死の門は畏懼に因りて爾の爲に啓け、地獄の門衛は爾を見て懼れたり、蓋爾は銅の門を破  
り、鐵の柱を折き、我等を幽闇と死の蔭より引き出し、我等の縛を截ち給へり。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

救の歌を歌ひて、口を齋しくして籲ばん、皆來りて、主の家に伏拜して曰はん、  
木の上に釘せられて、死より復活し、父の懷に在す主よ、我等の罪を淨め給へ。

句、願はくはイズライリは主を待まん、蓋隣は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイズライリを其  
悉くの不法より贖はん。

倚頼なき者の堅固なる憑恃、罪に陥る者の拯救たる讃め歌はるるマリヤ、潔き生神女よ、我が此の禱  
を受けて、爾の母たる祈禱を以て我に生涯犯しし諸罪の赦を獲しめ給へ。女宰よ、爾の大なる憐  
に由りて、我を危難及び將來の定罪より救ひ給へ。

句、萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。

我が在世の日は悪し、悪しくして罪惡に充つ、凶惡なるサタナ甚しく我を擾すに因る。神の母よ、爾  
我を其害より免れしめ、至聖なる者よ、爾我を其口より脱し給へ、我悉くの憑恃を爾に負はせられ  
ばなり。爾の熱切なる祈禱を以て我を救ひ給へ。

句、<sup>けだしかれ われら ほごこ あわれみ おおい</sup>蓋彼が我等に施す<sup>しゅ しんじつ なが そん</sup>憐は大なり、主の眞實は永く存す。

<sup>ほじ え てんたつしや よろこ しぜん しょうしんじよ よろこ せかい きよめ よろこ かな もの よろこび ぐふう</sup>耻を得ざる轉達者よ、慶べ、至善なる生神女よ、慶べ、世界の錫潔よ、慶べ、悲しむ者の喜、颶風  
<sup>あ もの みなと よろこ およ きなん あ もの ふじよしや よろこ どうていじよ じゅんけつ じよさい われ もん ことごと</sup>に遭ふ者の停泊よ、慶べ、凡そ危難に在る者の扶助者よ、慶べ。童貞女・純潔なる女宰よ、我をも悉  
<sup>くなん まま たま</sup>くの苦難より護り給へ。

光榮は父と子と聖神にきす今もいつも世世にアミン  
恩<sup>オン</sup>寵<sup>チヨウ</sup>きたりて法律<sup>ホウリツ</sup>の<sup>ホ</sup>かげはされりもゆるいばらの焼<sup>ヤ</sup>け  
ざりしごとく童貞女<sup>ドウテイジョ</sup>は生<sup>ナ</sup>みし後<sup>ノチ</sup>も永<sup>ナガ</sup>く童貞女  
なり炎<sup>ホノ</sup>の柱<sup>ヘシラ</sup>のかわりに真<sup>マコト</sup>の日は出<sup>ヒ</sup>でてひか  
る  
モイセイ<sup>モイセイ</sup>のかわりにわがたましいの救者<sup>キウシャ</sup>父<sup>ト</sup>上<sup>ウエ</sup>  
はあらわれたり

→通常部分 (P6「聖にして福たる」へ戻る)

【スポタのポロキメン】(6調) 第92聖詠1—5

重連禱

誦経「主や我等を守り」

増連禱

(増連禱が終わったら)

# 2 調

## 挿句のスティヒラ

### 挿句に主日の讃頌、第二調。

ハリストス 救世主よ、爾の復活は全世界を照せり、爾は己の造物を召し給へり。全能の主よ、光榮は爾に歸す。

#### 又 讃頌

句、主は王たり、彼は威嚴を衣たり。

救世主よ、爾は木にて木に縁る 詛を空しくし、爾の葬にて死の權を滅し、爾の復活にて吾が族を照し給へり。故に我等爾に呼ぶ、生命を施すハリストス我が神よ、光榮は爾に歸す。

句、故に世界は堅固にして動かざらん。

ハリストスよ、爾は十字架に釘せらるる者と顯れて、造物の美しきを變易せり。惟兵卒は殘忍にして戈を以て爾の脅を刺し、エウレイ人は爾の權を知らずして墓を封印せんことを求めたり。慈憐に由りて葬を受け、三日目に復活せし主よ、光榮は爾に歸す。

句、主よ、聖徳は爾の家に屬して永遠に至らん。

生命を施すハリストスよ、爾は死に屬する者の爲に甘じて苦を受けて、有能者として地獄に降り、彼處に爾の降臨を待つ者を強き者の手より奪ひて、地獄に易へて樂園に住むを賜へり。故に爾の三日目の復活を讃揚する我等にも諸罪の潔淨と大なる憐とを與へ給へ。

#### 「光榮、今も」、生神女讃詞。

嗚呼新なる奇跡、古の悉くの奇跡に勝る者や。誰か夫なき母が萬物を有つ主を生みて、其手に抱くを知りたる、此の産は神の旨なり。至りて潔き者よ、爾が嬰兒として己の手に抱きし主の前に母の勇を以て、我等爾を尊む者の靈を憐みて救はんことを常に祈り給へ。

→通常部分 P10「シメオンの祝文」へ戻る

「聖三祝文」「至聖三者」「天主經」

司祭 蓋国と權能と光榮は爾父と子と聖神<sup>に</sup>に歸す、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

「生神童貞女や、慶べよ」

「願わくは主の名は崇めほめられ……」

# 早 課

来たれ…、【六段の聖詠】【大連禱】に続いて

<カフィズマ、セダレンは省略>

## 2 調

## 主は神なり、主日トロパリ

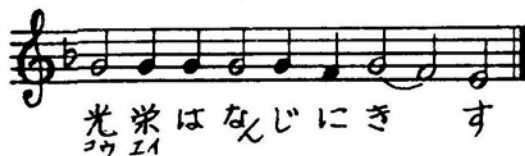
主は神なり我等を照せり、主の名に依りて来る者は崇め讃めらる、

(第1句) 主を尊み讃めよ、彼は仁慈にして其憐は世世にあればなり、

(第2句) 彼等我を囲み我を環れども、我主の名を以て之を敗れり、

(第3句) 我死せず、猶生きて主の行ふ所を伝へん、

(第4句) 工師が棄てし所の石は屋隅の首石となれり、是主のなす所にして我等の目に奇異なりとす、



→通常部分 P15 【ポリエレイ】「主の名を讃め揚げよ」

<ポリエレイ後のセダレン、ネポロチニ省略>

【復活のエフロギタリア】「主や爾は崇め讃める」

【小連禱】【アンティフォン】 4 調

# 2 調

【アンティフォン】

品第詞、第二調。第一偈和詞。毎句復唱す。

救世主よ、我が心の目を天に爾に擧ぐ、爾の光照にて我を救ひ給へ。嗚呼吾がハリストスよ、時毎に多く爾に罪を犯せる我等を憐みて、終の前に爾に痛悔する法を與へ給へ。

光榮、(今も)

聖神には宰制し、聖を施し、造物を活動せしむること適ふ、父及び子と一性の神なればなり。(以下省略 今も、同上。)

第二偈和詞

若し主我等の中にあらずば、誰か敵又殺人者より全うし護らるるに堪へん。  
救世主よ、爾の僕を彼等の齒に付す勿れ、蓋我が敵は獅の如く我に向ひ進む

光榮

聖神には生命の泉及び尊榮は屬す、蓋神として、其力を以て、一切の造物を父の中に、子に因りて守る。 今も、同上。

第三偈和詞

主を頼む者は聖山に似たり、敢て敵の攻撃に因りて動かざらん。  
敬虔に生を送る者は己の手を不法に伸ぶべからず、蓋ハリストスは其嗣業の爲に杖を放たず。

光榮

聖神にて一切の智慧は涌き出さる、是より使徒は恩寵を斟み、致命者は苦に因りて榮冠を冠り、預言者は見る。 今も、同上。

☆提綱、第二調

主我が神よ、起きて、爾が定めし審判を行ひ給へ、萬民爾を環らん。  
句、主我が神よ、我爾を頼む、我を救ひ給へ。

Zm 2調

主我が神よ、起きて 爾が定めし審判を行ひ給へ、  
万民 なんじを めぐらん

【福音の読み】

【福音後のスティヒラ】「ハリストスの復活を見て」

輔祭 「神よ爾の大いなる憐れみによって」「主憐れめよ」12回

# 2 調 カノン

主日のカノン、第二調 <第1のカノン(復活)のみ、第2(十字架復活)、第3(生神女)は省略>

○第一歌頌

イルモス、<sup>まった そな</sup> 全く備はれる力は昔<sup>ちから むかし</sup>ファラオンの全軍<sup>ぜんぐん</sup>を深水<sup>ふかみ</sup>に敷き、<sup>しんたい と</sup>人體を取りし言、<sup>ことば</sup>讚榮せらるる主は萬<sup>しゆ</sup>の悪<sup>よろず</sup>を致<sup>あく</sup>す罪<sup>いた</sup>を滅し給へり、<sup>つみ</sup>彼<sup>ほろぼ</sup>嚴<sup>たま</sup>に光榮<sup>かれおごそか</sup>を顯<sup>こうえい</sup>したればなり。<sup>あらわ</sup>

第1歌頌

<sup>まった そな</sup>  
 全 　　く 　　備 　　わ 　　れ 　　る 　　ち 　　か 　　ら 　　は 　　む 　　か 　　し 　　フ 　　ア 　　ラ 　　オ 　　ン 　　の  
<sup>ぜんぐん ふかみ</sup>  
 全 　　軍 　　を 　　深 　　水 　　に 　　敷 　　- 　　- 　　き 　　、 　　人 　　体 　　を 　　取 　　り 　　し 　　言 　　讚 　　榮 　　せ 　　ら 　　る 　　る  
<sup>しゆ</sup> 主 　　- 　　は 　　<sup>よろず</sup> 萬 　　の 　　悪 　　を 　　致 　　す 　　罪 　　を 　　滅 　　ぼ 　　し 　　た 　　ま 　　え 　　り  
<sup>おごそ</sup> 彼 　　嚴 　　か 　　に 　　光 　　榮 　　を 　　<sup>あらわ</sup> 顯 　　し 　　た 　　れ 　　ば 　　な 　　り

附唱、<sup>しゆ</sup>主よ、<sup>こうえい</sup>光榮は爾の<sup>なんじ</sup>聖なる<sup>せい</sup>復活<sup>ふっかつ</sup>に歸す。<sup>き</sup>

至善<sup>しぜん</sup>なる主<sup>しゆ</sup>よ世<sup>よ</sup>の君<sup>きみ</sup>、我等<sup>われら</sup>が爾<sup>なんじ</sup>の誠<sup>いましめ</sup>に背<sup>そむ</sup>きて服從<sup>ふくじゆう</sup>せし者は爾<sup>もの</sup>の十字架<sup>じゆうじか</sup>にて定罪<sup>ていざい</sup>せられたり、蓋<sup>けだし</sup>死<sup>し</sup>に屬<sup>ぞく</sup>する者<sup>もの</sup>と爲<sup>な</sup>して爾<sup>なんじ</sup>に觸<sup>ふ</sup>れて、爾<sup>なんじ</sup>の權能<sup>けんのう</sup>に由<sup>よ</sup>りて權<sup>けん</sup>を失<sup>うしな</sup>ひ、弱<sup>よわ</sup>き者と顯<sup>あらわ</sup>れたり。

附唱、<sup>しゆ</sup>主よ、<sup>こうえい</sup>光榮は爾の<sup>なんじ</sup>聖なる<sup>せい</sup>復活<sup>ふっかつ</sup>に歸す。<sup>き</sup>

爾<sup>なんじ</sup>は人類<sup>じんるい</sup>の贖罪<sup>しょくざい</sup>主<sup>しよくざいしゆ</sup>及<sup>およ</sup>び不朽<sup>ふくしゆう</sup>の生命<sup>いのち</sup>の首<sup>かしら</sup>として世<sup>よ</sup>に來<sup>きた</sup>れり、蓋<sup>けだし</sup>爾<sup>なんじ</sup>の復活<sup>ふっかつ</sup>を以<sup>もつ</sup>て死<sup>し</sup>の縲紲<sup>なわめ</sup>を斷<sup>たま</sup>ち給<sup>たま</sup>へり。我等<sup>われら</sup>皆<sup>みな</sup>之<sup>これ</sup>を讚榮<sup>さんえい</sup>す、爾<sup>なんじ</sup>嚴<sup>おごそか</sup>に光榮<sup>こうえい</sup>を顯<sup>あらわ</sup>したればなり。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン

生神女讚詞

潔<sup>いさぎよ</sup>き永貞<sup>えいてい</sup>童女<sup>どうじよ</sup>よ爾<sup>なんじ</sup>は見<sup>み</sup>ゆると見<sup>み</sup>えざる一切<sup>いっさい</sup>の造物<sup>ぞうぶつ</sup>より至<sup>いた</sup>りて上<sup>うへ</sup>なる者<sup>もの</sup>と顯<sup>あらわ</sup>れたり、造<sup>ぞうせい</sup>成<sup>せい</sup>主<sup>しゆ</sup>を生<sup>う</sup>

そのなんじ たいない み と ほつ ごと かれ いさみ もつ わ たましい すく いの  
 みたればなり、其 爾 の胎内に身を取らんと欲せしが如し。彼に勇敢を以て我が 靈 を救はんことを祈  
 たり給へ。

<十字架復活のカノン、生神女のカノンは省略>

### 第三歌頌

イルモス、<sup>しゅ あれち ごと み むす いほう きょうかい なんじ きた よ ゆり ごと はな わ ころこ これ</sup>  
 主よ、荒地の如く實を結ばざる異邦の教會は、爾の來るに因りて、百合の如く華さけり、我が心は此  
 に縁りて固められたり。(楽譜は次のページ)

第3歌頌

主よ、<sup>あ</sup>荒地の如く<sup>ごと</sup>實を結ばざる<sup>いほう</sup>異邦の<sup>か</sup>教會<sup>い</sup>は  
 なんじの來たるに<sup>ゆり</sup>よ-り-て<sup>はな</sup>百合の如く<sup>華</sup>はな咲けり  
 我が心はこれに<sup>ゆり</sup>よ-り-て<sup>かた</sup>かためられたり

**附唱、**<sup>しゅ こうえい なんじ せい ふっかつ き ぞうぶつ なんじ くるしみ よ へん なんじしんせい</sup>  
 主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。造物は爾の苦に因りて變じたり、爾神聖な  
<sup>し き もつ いっさい もと しゅ いや かたち おい ふほうしゃ はずか み</sup>  
 る指塵を以て一切を基づけたる主が卑しき形に於て不法者より辱しめらるるを見たればなり。

**附唱、**<sup>しゅ こうえい なんじ せい ふっかつ き</sup>  
 主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

<sup>なんじ おのれ ぞう かたど なんじ て もつ われ ちり つく またつみ ため ち ちり かえ</sup>  
 ハリストスよ、爾は己の像に形りて、爾の手を以て我を塵より造り、復罪の爲に地の塵に還さ  
<sup>もの じごく くだ おのれ とも ふっかつ たま</sup>  
 れし者を地獄に下りて、己と偕に復活せしめ給へり。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン

### 生神女讃詞

<sup>しじょう もの なんじ さん よ てんし ひんい おどろ ひとびと ころこ おそ ゆえ われらしん もつ なんじ</sup>  
 至淨なる者よ、爾の産に因りて天使の品位は驚き、人人の心は懼れたり、故に我等信を以て爾  
<sup>しょうしんじょ とおと</sup>  
 を生神女と尊む。

### 第四歌頌

イルモス、<sup>どうていじょ よ きた もの ししや あら てんし あら しゆみずか じんたい と われまった ひと すく たま</sup>  
 童貞女に藉りて來りし者は使者に非ず、天使に非ず、主親ら人體を取りて、我全き人を救ひ給  
<sup>ゆえ われなんじ よ しゅ こうえい なんじ ちから き</sup>  
 へり。故に我爾に呼ぶ、主よ、光榮は爾の力に歸す。



第4歌頌

<sup>どう</sup> <sup>てい</sup> 童 貴 女 に 藉 り て 来 たり し も の は 使 者 に あ ら ず  
 天 使 に あ ら ず 主 親 ら 人 体 を 取 り て  
<sup>また</sup> 我 全 き 人 を 救 い た ま え り 故 に わ れ な ん じ に  
 呼 ぶ 主 よ 光 榮 は 爾 の ち か ら に 帰 す

**附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。**

わ か み しんぼん しよみん おこな しゆさい なんじ こえ いた しんぼん もの しんぼんぎ まえ た  
 我が神、審判を諸民に行ふ主宰よ、爾は聲を出さずして、審判せらるる者として審判座の前に立  
 つ。ハリストスよ、爾は此の苦しみにて世界の爲に救を立て給へり。

**附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。**

なんじ くるしみ よ てき ぶきことごと つ なんじ じごく くだ よ あだ まち こぼ  
 ハリストスよ、爾の苦しみに因りて敵には武器悉く盡き、爾が地獄に下るに因りて仇の城邑は毀た  
 れ、苦しむる者の狂暴は壊られたり。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン

生神女讃詞

じよさいしやうしんじよ われらしやうしんじや なんじ すくい みなとおよ けんご しろ し なんじ  
 女宰生神女よ、我等衆信者は爾を救の湊及び堅固なる城として知る、爾の  
 きとう よ われら たましい きなん のが たま  
 祈祷に因りて我等の靈を危難より脱れしめ給へばなり。

第五歌頌

イルモス、ハリストス神よ、爾は神と人との中保者と爲れり、主宰よ、我等は爾に依りて、無智の闇より光の原なる爾の父  
 に就くを得たればなり。

第5歌頌

ハリストス か- み よ、なんじは 神と人との<sup>なかだち</sup>仲保者と  
なれ- り 主宰よ、我等は 爾に よりて  
無知の やみ より <sup>ひかり</sup>光の <sup>もと</sup>素なる 爾の 父に  
就くを得たれば なり

**附唱、主よ、光榮は 爾の 聖なる復活に歸す。**

主宰ハリストスよ、 爾は身にて 甘じて松と黄楊樹と柏香木とに 擧げられしに 因りて、リワン  
の柏香木を 摧く如く、諸民の 驕を 壊り給へり。

**附唱、主よ、光榮は 爾の 聖なる復活に歸す。**

ハリストスよ、 彼等 爾を 氣息なき 死者として 最深き 坎に 置きたれども、 爾は 傷つけられて、 爾の 傷  
に 因りて 墓に 寝ぬる 遺れられたる 死者を 爾と 偕に 復活せしめ 給へり。

**光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン**

生神女讃詞

潔き童貞女よ 爾を頼む者を 諸敵の攻撃より 護りて、之に平安を賜はんことを 爾の子及び主  
に 祈り 給へ。

第六歌頌

イルモス、我罪の淵に溺れて、爾が憐の量り難き淵に呼ぶ、神よ、我を淪滅より引き上げ給へ。

第6歌頌  
我罪の 淵に おぼ れて 爾が 憐れみの 量り難き淵に  
呼ぶ かみよ われを 滅びより 引きあげたまえ

**附唱、主よ、光榮は 爾の 聖なる復活に歸す。**

義者は 犯罪者の如く 定罪せられ、 犯罪者と 偕に 木に 釘せられて、 己の 血に 由りて 罪過あ

もの ゆるし たま  
る者に 赦を賜ふ。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

むかしひとりだいいち よ し よ い またひとりかみ こ よ ふっかつ あらわ  
昔一人第一のアダムに由りて死は世に入り、又一人神の子に由りて復活は顯れたり。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン

### 生神女讃詞

どうていじょ なんじ おっと し う またえいえん どうていじょ とど なんじ こ およ かみ まこと しんせい  
童貞女よ、爾は夫を識らずして生み、又永遠に童貞女に止まりて、爾の子及び神の眞の神性  
するし あらわ  
の印象を顯す。

### ◇小連禱

### 小讃詞、第二調。

ぜんのう きゆうせいしゆ なんじはか ふっかつ じごく きせき み おのの ししや お ぞうぶつ み なんじ とも  
全能の救世主よ、爾墓より復活せしに、地獄は奇蹟を見て慄き、死者は起き、造物は見て爾と偕  
よろこ とも たの わ きゆうせいしゆ せかい つね なんじ ほ うた  
に喜び、アダムは共に楽しみ、我が救世主よ、世界は常に爾を讃め歌ふ。

<同讃詞 省略>

### 第七歌頌

イルモス、不法なる虐者の神に戻る命令は高き焰を起したれども、讃め歌はるるハリストスは敬虔の少者  
に屬神の露を降し給へり。(楽譜は次ページ)

第7歌頌

ふほう いたげびと の 神にもとる 命 令は たかき  
焰を 起こした れ ども 讃め歌わ るる ハリストスは  
敬虔の少 者に 属神の 露を 降し たまえり

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

しゅさい なんじ じれん よ ひと し くる み しの ひと な きた なんじ ち  
主宰よ、爾は慈憐に由りて人の死に苦しめらるるを見るに忍びずして、人と爲り、來りて、爾の血  
もつ これ すく たま なんじ わ せんぞ さんびさんえい かみ  
を以て之を救ひ給へり、爾は我が先祖の讚美讚榮せらるる神なればなり。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

じごく かどもり なんじ ふくしゅう ころも き み おそ けだしなんじしゅさい きょうぼう ざんぎやくしゃ  
ハリストスよ、地獄の門衛は爾が復讐の衣を衣たるを見て懼れたり、蓋爾主宰は狂暴の殘虐者  
どれい ころ たため きた たま なんじ わ せんぞ さんびさんえい かみ  
たる奴隷を殺さん爲に來り給へり、爾は我が先祖の讚美讚榮せらるる神なればなり。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン

### 生神女讃詞

むてん どうていじょ よ め はは われらなんじ ひとりへんえき かみ う もの せいしや うち いた せい  
無玷なる童貞女、聘女ならぬ母よ、我等爾を獨變易なき神を生みし者として、聖者の中に至りて聖  
もの し けだしなんじ しんせい なんじ さん しゅうしんじや ふきゆう なが たま  
なる者なりと識る、蓋爾は神聖なる爾の産にて衆信者に不朽を流し給へり。

### 第八歌頌

イルモス、昔ワフィロンの火の爐は神の命によりて其勢を分ち、ハルデイを焦して、信者を涼しくせり、主の悉  
くの造物は主を崇め讃めよと歌へばなり。(楽譜は次ページ)

第8歌頌



むかし バビロンの 火の いろ りは 神の 命によりて  
その勢いをわか - ち ハルデイを焦がして 信者を  
涼しく せ - り 主の悉くの 造物は  
主を崇め讃めよと 歌えばな - り

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

てんし ひんい なんじ にくたい ころも なんじ ち あか み おのの なんじ おおい かんにん  
ハリストスよ、天使の品位は爾の肉體の衣が爾の血にて赤みたるを見て慄き、爾の大なる寛忍  
おどろ よ しゅ ことごと ぞうぶつ しゅ あが ほ  
に驚きて呼べり、主の悉くの造物は主を崇め讃めよ。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

じれん なんじ おのれ ふっかつ もつ われ し ぞく せい ふ し き たま ゆえ えらび こうむ  
慈憐なるハリストスよ、爾は己の復活を以て我の死に屬する性に不死を衣給へり。故に選を蒙り  
たみ かんしゃ なんじ ほ うた たのし なんじ よ じつ し かの  
たる民は感謝して爾を讃め歌ひ、樂しみて爾に呼ぶ、實に死は勝に吞まれたり。

父と子と聖神の一なる神を讃め揚げん、今も何時も世々に、アミン

### 生神女讃詞

しじょう かみ ぼ なんじ ちち わか もの たね たいない はら い がた う たま ゆえ われら  
至淨なる神の母よ、爾は父に別れざる者を種なく胎内に孕みて、言ひ難く生み給へり。故に我等  
なんじ われしゅう すくい みと  
は爾を我衆の救と認む。

### 【生神女の歌】歌う

我が心は主を崇め、我が霊は神我が救主を悦ぶ。

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え、貞操を破らずに神ことばを生みし実の生神女  
たる爾を崇め讃む。

第2句 その婢の卑しきを願み給へり、今より萬世我を福なりと言はん、

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え……

第3句 <sup>ちから</sup>権能を持ち給へるものは、我が為に大なる事を為せり、  
其の名は聖なり、其の憐れみは世世 彼を畏るる者に臨まん

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え……

第4句 其の肘の力を表して、心の驕れるものを散らし給へり、

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え……

第5句 権ある者を位より斥け、卑しき者を上げ、飢うる者を善に飽かせ、富める者をむなしく帰らせ  
給へり。

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え……

第6句 其の僕、イズライリを納れて、我が先祖に告げしが如く、

アウラムと其の裔を世世に憐れむ事を記憶し給へり、

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え……

### 第九歌頌

<sup>なげん ちち こ かみ しゆ どうていじょ じんたい と われら あらわ くら もの あ ち</sup>  
イルモス、無原の父の子、神と主は、童貞女より人體を取り、我等に現れて、昧まされし者を明かし、散  
<sup>もの あつ たま ゆえ われらさんび しょうしんじょ あが うた</sup>  
らされし者を集め給へり。故に我等讃美たる生神女を崇め歌ふ。

第9歌頌

無原の父の子 神と主は 童貞女より 人体を取り  
我等に現 われて 昧まされし者を明 かし  
散らされ者を集めたま えり 故に我れ等 讃美たる  
生神女を あがめ うた - う

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

きゆうせいしゅ なんじ しじょう じゅうじか み え そんき き ちどう お ごと されこうべ ところ  
 ハリストス救世主よ、爾の至淨なる十字架の三重に尊貴なる木は地堂に於けるが如く觸體の處  
 う しんせい いずみ ごと なんじ わき しんせい ち みず うるお われら ため いのち  
 に植えられ、神聖なる泉よりするが如く爾の脅の神聖なる血と水とに濕されて、我等の爲に生命  
 しょう  
 を生じたり。

**附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。**

ぜんのおうしゃ なんじ じゅうじか あ ゆうけんしゃ おと しも けんご じごく ふ ひと せい あ ちち  
 全能者よ、爾は十字架に上げられて、有權者を墜し、下に堅固なる地獄に伏したる人の性を舉げて、父  
 ほうざ ざ われらちち とも なんじまたきた しゅ ふくはい あが うた  
 の寶座に坐せしめたり。我等父と偕に爾還來らんとする主に伏拜して崇め歌ふ。

**光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、アミン**

**聖三者讃詞**

われらしんじゃ さんい ゆいいつしゃ いつせい さんしゃ しんせい うた わか しせい せいたい さんみょう く  
 我等信者は三位なる惟一者、一性の三者を眞正に歌ひて、分れざる至聖なる性體、三妙の暮れざ  
 ひ どんいつえいざい ひかり われら かがや かみ さんえい  
 る日、獨一永在にして、光を我等に輝かしし神を讃榮す。

→通常部分へ戻る P29

◇ 小聯禱

「主我等の神は聖なり」

【差遣詞】

## 2 調 【讃揚歌とスティヒラ】

【凡そ呼吸ある者】

およそいきあるものは主をほめあげよ 天より主を  
 ほめあげよ 至と高きにかれをほめあげよ ほめ歌は  
 なんじかみに歸す そのことごとくの神使やかれを  
 ほめあげよ そのことごとくの單やかれをほめあげよ  
 ほめ歌はなんじかみにきす

→通常部分 P31 に戻る 【大頌栄】を歌う

【定規のトロパリ】

【重連祷、増連祷】 早課の終わり。発放詞。

## 一時課

<一時課の変更箇所は、トロパリ、コンダクのみ>

# スボタ晩 課

【首唱(103)聖詠】「我が霊や」、【大連禱】

【カフィズマ】第一段「悪人の謀」歌う、

【小連禱】

## 3 調

「主や、爾によぶ」主日3調 [時課経P182]

◇時課経 P180「主や我が口に」～P183「…強ければなり」まで省略

わ たましい ひとや ひ いだ われ なんじ な さんえい たま  
 句、我が 霊 を 獄より引き出して、我に 爾 の名を讃榮せしめ給へ。  
 きゆうせいしゆ なんじ じゆうじか し げん ほろぼ あくま いざない むな  
 ハリストス 救世主よ、 爾の十字架にて死の權は滅され、悪魔の誘惑は空しくせられ  
 しん もつ すく ひと やから つね うた なんじ たてまつ  
 たり。信を以て救はるる人の族は恒に歌を 爾に 奉る。  
 なんじおん われ たま としき ぎじん われ めぐ  
 句、 爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。  
 しゆ なんじ ふつかつ ほんゆう てら らくえん ふたたびひら ことごと そうぶつ なんじ ほ あ つね うた  
 主よ、 爾の復活にて萬有は照され、樂園は再 開かれたり。 悉くの造物は 爾を讃め揚げて、恒に歌



なんじ たてまつ  
を爾に奉る。

句、主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聴き給へ。

われ ちちおよ こ ちから あが せいしん けん うた わか つく しんせい いったい さんしゃ よよ おう もの ほ  
我は父及び子の能力を崇め。聖神の權を歌ひ、分れず造られざる神性、一體の三者、世に王たる者を讃め揚ぐ。

又アナトリーの讃頌、同調。

句、願はくは爾の耳は我が禱の聲を聴き納れん。

ハリストスよ、我等爾の尊き十字架に伏拜し、爾の復活を歌頌讃榮す、蓋爾の傷に因りて我等皆癒されたり。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

われら どうていじよ み と きゆうせいしゅ うた けだしわれら ため じゅうじか てい みつかめ かつかつ われら  
我等は童貞女より身を取りし救世主を歌ふ、蓋我等の爲に十字架に釘せられ、三日目に復活して、我等に大なる憐を賜へり。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

ハリストスは降りて、地獄に在る者に福音して曰へり、勇めよ、今勝てり、我は復活なり、我死の門を破りて、爾等を引き上げん。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

ハリストス神よ、我等爾の至淨なる家に立つに堪へざる者は晩の歌を奉りて、深き心より籲ぶ、爾の三日目の復活にて世界を照しし人を愛する主よ、爾の民を爾の諸敵の手より脱れしめ給へ。

句、願はくはイブライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、彼はイブライリを其ことごと悉くの不法より贖はん。

童貞女よ、我何事に遇ひても爾の神聖なる恩寵を呼ぶ者に慈憐を垂れて、速に聴き給へ、蓋我が靈の望を一切爾に負はせたり。我萬事に於て爾の神聖なる慮を待む、爾我に將來の光榮及び神聖なる生命をも獲しめ給へ。

句、萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。

生神女よ、我が諸愆の炭は我の中に燃えたり。祈る、女宰よ、怒と憤、沉湎と邪淫、貪婪と頑固、怠惰と煩悶、驕慢と良心に戻ることに吾が靈を脱れしめて、我を救ひ給へ。

句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

われら みないきぎよ りょうしん もつ しょうしんじよ まえ ふふく こころ うち た よ せい じよさい われら しゅう  
我等皆潔き良心を以て生神女の前に俯伏して、心の内より絶えず呼ばん、聖なる女宰よ、我等衆

を愠怒と忿恨、災禍と誘惑より救ひ給へ。蓋我等は爾を垣牆及び保固として獲て、爾の旃幟の下に趨り附きて、爾に依りて救はる。



光榮は父と子と聖神に帰す今もいつも世世にアミン  
いと尊とぎものやわれらいかで汝が神人を生みしに  
おどろかざらんや至ってきずなきものや汝は夫のいざ  
ないをうけずして世のなき先より母なく父に生まれいざ  
さかも変り或いはまじり或いは分れをうけず二つの性の  
質を全うして守れる子を父なく身にて生めり故に  
母童貞女女さいや正しく汝を生神女とうけとむるもの  
たましいの救わるることをかれにいのりたまえ

◇「聖にして福たる」を歌う

→通常部分 (P7/8「聖にして福たる」へ戻る

【スポタのポロキメン】(6調) 第92聖詠1—5

重連禱

誦経「主や我等を守り」

増連禱

(増連禱が終わったら)

# 3 調 挿句のステヒラ

## ○挿句に主日の讃頌、第三調。

おのれ くるしみ ひ くら おのれ ふっかつ ひかり ばんぶつ てら ひと いつくし しゅ われら くれ うた  
己の苦にて日を晦くし、己の復活の光にて萬物を照ししハリストス、人を慈む主よ、我等の晩の歌  
を納れ給へ。

ステヒラ  
他の讃頌

句、主は王たり、彼は威嚴を衣たり。

しゅ なんじ いのち ほどこ ふっかつ ぜんせかい てら なんじ く ぞうぶつ おこ ゆえ われら のろい だつ  
主よ、爾が生命を施す復活は全世界を照して、爾の朽ちたる造物を興せり。故に我等アダムの詛を脱  
して呼ぶ、全能の主よ、光榮は爾に歸す。

句、故に世界は堅固にして動かざらん。

なんじ へんえき かみ み くるしみ う へんえき ぞうぶつ なんじ じゅうじか かか み た  
爾は變易せざる神にして、身にて苦を受けて變易せり。造物は爾が十字架に懸れるを見るに堪へず  
して、恐懼に由りて變じ、歎息して爾の恒忍を讃め揚げたり。爾は地獄に降り、三日目に復活して、世界  
に生命と大なる憐とを賜へり。

句、主よ、聖徳は爾の家に屬して永遠に至らん。

なんじ わ やから し すく ため し の みっかめ し ふっかつ なんじ かみ しきにん  
ハリストスよ、爾は我が族を死より救はん爲に死を忍び、三日目に死より復活して、爾を神と識認せ  
し者を己と偕に復活せしめて、世界を照し給へり。主よ、光榮は爾に歸す。

光榮、今も、生神女讃詞。

なんじ たね せいしん よ ちち むね もつ かみ こ よ な さき はは ちち うま もの ほら われら ため  
爾は種なく聖神に由りて、父の旨を以て、神の子、世の無き先に母なく父より生れし者を妊み、我等の爲  
に父なく爾より在りし者を身にて生み、嬰たる者を乳にて養へり。彼に我等の靈を諸難より脱れ  
しめんことを息めずして禱り給へ。

→通常部分 P10 「シメオンの祝文」へ戻る

「聖三祝文」「至聖三者」「天主經」

司祭 蓋国と権能と光榮は爾父と子と聖神<sup>°</sup>に歸す、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」

「生神童貞女や、慶べよ」

「願わくは主の名は崇めほめられ……」

# 早 課

来たれ…、【六段の聖詠】【大連禱】に続いて  
＜カフィズマ、セダレンは省略＞

## 3 調

## 主は神なり、主日トロパリ

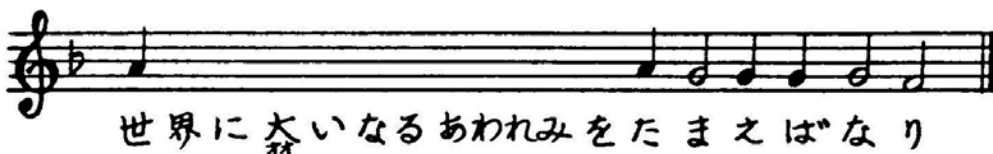
主は神なり我等を照せり、主の名に依りて来る者は崇め讃めらる、

(第1句) 主を尊み讃めよ、彼は仁慈にして其憐は世世にあればなり、

(第2句) 彼等我を囲み我を環れども、我主の名を以て之を敗れり、

(第3句) 我死せず、猶生きて主の行ふ所を伝へん、

(第4句) 工師が棄てし所の石は屋隅の首石となれり、是主のなす所にして我等の目に奇異なりとす、



→通常部分 P15 【ポリエレイ】「主の名を讃め揚げよ」

<ポリエレイ後のセダレン、ネポロチニ省略>

【復活のエフロギタリア】「主や爾は崇め讃める」

【小連禱】【アンティフォン】 4 調

# 3 調

【アンティフォン】

## 品第詞、第三調。第一倡和詞、毎句復唱す。

ことば なんじ とりこ ひ いた われ しょよく いのち ひ よ たま  
言よ、爾はシオンの虜をワフィロンより引き出せり、我をも諸慾より生命に引き寄せ給へ。  
みなみかぜ とき しんせい なみだ もつ ま もの よるこび もつ えいせい ほ か  
南風の時に神聖なる涙を以て播く者は、喜を以て永生の穂を刈る。

光榮 (今も)

せいしん およそ よ たまもの ぞく けだしかれ ちちおよ こ とも かがや ばんぶつ かれ よ う かつうご  
聖神には凡の善き賜は屬す、蓋彼は父及び子と偕に輝き、萬物は彼に頼りて生き且動く。 <  
省略 今も、同上。>

第二倡和詞。

若し主諸徳の家を造らずば我等徒に勞す、主靈を蔽はんに、誰も我等の城を破らざらん。聖神の腹の果たる諸聖人は、父の子なると均しく、恒に爾ハリストスの子なり。

光榮

せいしん ち じつ けだしかれ せいじ いっさい ちち ちえ どうきつ けだしかれ よ ばんぶつ せいぞん われら ちち およ  
聖神に藉りて一切の聖事、一切の智慧は洞察せらる、蓋彼に縁りて萬物は生存す。我等父及び言に於けるが如く彼に務めん、其神なればなり。 今も、同上。

第三倡和詞。

主を畏れて誠の道を行く者は福なり、生命の諸果を食はんとすればなり。  
牧師長よ、爾の諸子が善業の枝を持ちて、爾の席を環れるを見て、樂しめよ。

光榮

せいしん およそ こうえい とみ い かわれ およそ ぞうぶつ おんちゆう いのち たま けだしかれ ちち およ ことば  
聖神より凡の光榮の富は出で、彼より凡の造物に恩寵と生命とは賜はる。故に彼は父及び言と齋しく歌はるるなり。 今も、同上

## 提綱、第三調

しょみん い しゅ おう ゆえ せかい けんご うご  
諸民に言ふべし、主は王たり、故に世界は堅固にして揺かざらん。

あらた うた しゅ うた ぜん ち しゅ うた  
句、新なる歌を主に歌へ、全地よ、主に歌へ。

Zm 3調

諸民に言うべし、主は王たり、ゆえに 世かい は  
堅固にして うごかざらん。

→通常部分 P20

【福音の読み】

【福音後のスティヒラ】「ハリストスの復活を見て」

輔祭 「神よ爾の大いなる憐れみによって」「主憐れめよ」12回

# 3 調 カノン

## 主日のカノン、第3調

カノン  
○主日の規程、第三調。

第一歌頌

イルモス、昔神妙の瞬にて水を一区に匯め、又イズライリ人の爲に海を分ちし者は、是れ崇め讃めらるる吾が神なり。我等獨彼に歌はん、彼光榮を顯したればなり。

第1歌頌

昔神妙の瞬にて水を一区にあつめ  
また イズライリ人のために海を分かちし者は  
これ崇め讃めらる我がかみなり我等一人彼に歌わん  
かれ光榮をあら顯わしたればなり

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

つち ぎてい つみ おか もの ため あせ み いばら いだ めい しゅ ほう もと て み  
 土を擬定して、罪を犯しし者の爲に汗の果として荆棘を出すことを命ぜし主、法に戻る手より身に  
 いばら かんむり う もの こ わ かみ かれ のろい ほろぼ たま こうえい あらわ  
 て荆棘の冠を受けし者は、是れ吾が神なり。彼は詛を滅し給へり、光榮を顯したればなり。

**附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。**

くるしみ あずか い み う よ し おそ もの し か これ やぶ もの あらわ こ わ  
 苦に與る生ける身を受けしに因りて死を懼れし者は、死に勝ちて之を破る者と顯れたり、是れ吾  
 かみ かれ ざんぎやくしや たたか しゅうじん おのれ とも ふっかつ たま こうえい あらわ  
 が神なり。彼は殘虐者と戦ひて、衆人を己と偕に復活せしめ給へり、光榮を顯したればなり。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン

**生神女讃詞**

ばんぞく なんじたね う み もの まこと しょうしんじょ さんえい けだしなんじ せい はら くだ もの こ わ かみ  
 萬族は爾種なく生みし者を眞の生神女と讃榮す、蓋爾の聖にせられし腹に降りし者は是れ吾が神な  
 かれ われら ため われら に もの な なんじ かみおよ ひと うま たま  
 り。彼は我等の爲に我等に肖たる者と爲りて、爾より神及び人として生れ給へり。

<●十字架のカノン、生神女のカノンは省略>

**第三歌頌**

ことば つく せいしん せん ばんぶつ む いだ しじょう ぜんのうしや なんじ ぬい わた がた  
 イルモス、言にて造られ、聖神にて備へらるる萬物を無より出しし至上なる全能者よ、爾の愛に我を固  
 たま  
 め給へ。(楽譜は次ページ)

第3歌頌

ことばにて つくら-れ 聖神にて備えらるる 万ぶ--つを  
 無きより 出だせ-し 至上なる 全能者や  
 爾の愛に 我をかた-めたま--え

**附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。**

なんじ じゅうじか もつ ふけんしや はずか けだしおとしあな ほ これ お みずか そのうち おちい  
 ハリストスよ、爾の十字架を以て不虔者は辱しめられたり、蓋 阱 を掘り、之を竣へて、自ら其中に陥  
 けんび もの つの なんじ ふっかつ よ あ  
 り、謙卑の者の角は爾の復活に藉りて擧げられたり。

**附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。**

ひと あい しゅ せいきょう でんどう しょみん こうふ みず うみ あふ ごと けだしなんじ はか ふっかつ せい  
 人を愛する主よ、聖教の傳道が諸民に廣布するは水の海に溢るるが如し、蓋 爾は墓より復活して、聖  
 さんしや ひかり あらわ たま  
 三者の光を顯し給へり。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン

**生神女讃詞**

えいえん おう しゅ い まち こうえい こと なんじ おい つた じょさい なんじ よ かみ ちじょう もの  
 永遠に王たる主の活ける城邑よ、光榮の事は爾に於て傳へられたり、女宰よ、爾に藉りて神が地上の者  
 とも お  
 と偕に居りたればなり。

◇小連祷

第四歌頌

イルモス、<sup>しゆ</sup>主よ、<sup>なんじ</sup>爾は<sup>つよ</sup>強き<sup>あい</sup>愛を<sup>われら</sup>我等に<sup>あらわ</sup>顯せり、<sup>われら</sup>我等の<sup>ため</sup>爲に<sup>なんじ</sup>爾の<sup>どくせい</sup>獨生子を<sup>し</sup>死に<sup>わた</sup>付したればなり。故に我等<sup>ゆえ</sup>感謝して<sup>われら</sup>爾に呼ぶ、<sup>なんじ</sup>主よ、<sup>ちから</sup>光榮は<sup>き</sup>爾の力に歸す。(楽譜は次ページ)

第4歌頌

主よなんじは 強き 愛を 我等に 顯わ- - せり  
 われらのために 爾の 獨生 の子を 死に付したればな- - - り  
 ゆえに 我等 感謝して なんじに 呼- ぶ  
 主よ、光榮は なんじの ちからに 帰- - す

附唱、<sup>しゆ</sup>主よ、<sup>こうえい</sup>光榮は<sup>なんじ</sup>爾の<sup>せい</sup>聖なる<sup>ふっかつ</sup>復活に<sup>き</sup>歸す。

ハリストスよ、<sup>なんじ</sup>爾は<sup>じれん</sup>慈憐に<sup>よ</sup>因りて<sup>きず</sup>瘡痕と<sup>いたみ</sup>毀傷とを<sup>う</sup>受け、<sup>ほお</sup>頬を<sup>はずかしめ</sup>批つ<sup>しの</sup>陵辱を<sup>ごうにん</sup>忍び、<sup>つばき</sup>恒忍にして<sup>う</sup>唾せらるるを<sup>た</sup>堪へ、<sup>これら</sup>此等を<sup>もつ</sup>以て<sup>ため</sup>我が<sup>すくい</sup>爲に<sup>な</sup>救を<sup>たま</sup>成し<sup>しゆ</sup>給へり。<sup>こうえい</sup>主よ、<sup>なんじ</sup>光榮は<sup>ちから</sup>爾の力に<sup>き</sup>歸す。

附唱、<sup>しゆ</sup>主よ、<sup>こうえい</sup>光榮は<sup>なんじ</sup>爾の<sup>せい</sup>聖なる<sup>ふっかつ</sup>復活に<sup>き</sup>歸す。

<sup>しえい</sup>至榮なる<sup>いのち</sup>生命よ、<sup>なんじ</sup>爾は<sup>まず</sup>貧しき<sup>もの</sup>者を<sup>くるしみ</sup>苦より、<sup>とぼ</sup>乏しき<sup>もの</sup>者を<sup>なげき</sup>嘆より<sup>すく</sup>救はん<sup>ため</sup>爲に、<sup>し</sup>死に<sup>ぞく</sup>屬する<sup>み</sup>身にて<sup>し</sup>死を受<sup>う</sup>け、<sup>やぶ</sup>壊りし<sup>もの</sup>者を<sup>やぶ</sup>壊り、<sup>しゅうじん</sup>衆人を<sup>おのれ</sup>己と<sup>とも</sup>偕に<sup>ふっかつ</sup>復活せしめ<sup>たま</sup>給へり、<sup>こうえい</sup>光榮を<sup>あらわ</sup>顯したればなり。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン

生神女讃詞

<sup>しゆ</sup>主ハリストスよ、<sup>なんじ</sup>爾の<sup>くるしみ</sup>苦にて<sup>え</sup>獲たる<sup>ぼくぐん</sup>牧群を<sup>きねん</sup>記念し、<sup>なんじ</sup>爾の<sup>しえい</sup>至榮なる<sup>はは</sup>母の<sup>じれん</sup>慈憐なる<sup>いのり</sup>禱を<sup>う</sup>受けて、<sup>はくがい</sup>迫害せらるる者を<sup>もの</sup>顧みて、<sup>かえり</sup>爾の<sup>なんじ</sup>力を<sup>ちから</sup>以て<sup>もつ</sup>之を<sup>これ</sup>救ひ<sup>すく</sup>給へ。

第五歌頌

イルモス、<sup>なんじ</sup>爾<sup>ばんぶつ</sup>萬物を<sup>つく</sup>造りし<sup>しゆ</sup>主、<sup>さと</sup>悟り<sup>がた</sup>難き<sup>へいあん</sup>平安に、<sup>あさ</sup>朝の<sup>いのり</sup>禱を<sup>たてまつ</sup>奉る、<sup>なんじ</sup>爾の<sup>いましめ</sup>誠は<sup>ひかり</sup>光なるに<sup>よ</sup>因りて、<sup>われ</sup>我に<sup>これ</sup>之を<sup>おし</sup>教へ<sup>たま</sup>給へ。(楽譜は次ページ)



第5歌頌

なんじ 万物をつくりし主 さと がた 悟り難き 平安に  
 朝の祈りを 奉つ---る 爾の誠は 光なる によって  
 我に これをおしえ たま---え

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

義を以て全地を審判する見ざる所なき主よ、爾はエウレイ人の媚嫉に因りて不義なる審判者に付されて、古のアダムを定罪より脱れしめ給へり。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

死より復活せしハリストスよ、爾の十字架の勝たれぬ力を以て爾の平安を爾の諸教會に與へて、我が靈を救ひ給へ。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン

生神女讚詞

永貞童女よ、爾は獨萬物の中に容れられざる神の言を容れて、天より至りて宏き聖なる幕と顯れたり。

第六歌頌

イルモス、今を限りの罪の淵は我を圍み、我が靈は凸びんとす。祈る、主宰教導者よ、爾の高き手を伸べて、我をペトルの如く救ひ給へ。

第6歌頌

今を 限りの 罪の 淵は 我を か こ め り  
 我がたましいは 亡び---んとす 祈る 主宰 教導者よ  
 爾の高き手を のべて 我をペトルのごとくすくいたまえ

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

しゅさい なんじ じんじ こうりん よ じれん こうおん ふち われ かこ けだしなんじ み と ぼく かたち う  
主宰よ、爾の仁慈なる降臨に因りて、慈憐と洪恩との淵は我を圍めり。蓋爾は身を取り、僕の形を受  
けて、我を神成して、己と偕に光榮を獲しめ給へり。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

ころ もの ころ しゅ い み し ふく こ なんじ ふっかつ あらわれ なんじ  
殺す者は殺されし主の生かされたるを見て、死に服せり。ハリストスよ、是れ爾の復活の表式、爾  
の至淨なる苦の勝利の記號なり。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン

### 生神女讚詞

ちえ こ ひとり ぞうせいしゅ およ ひとびと てんたつしゃ な しじょう もの なんじ こ つみ おか なんじ しょぼく  
智慧に超えて 獨造成主及び人人の轉達者と爲りし至淨なる者よ、爾の子が罪を犯しし爾の諸僕  
に慈憐を垂れて、援助を施さんことを祈り給へ。

### ◇小連禱

コンダク

### ○小讚詞、第三調。

じれん しゅ なんじ いまはか ふっかつ われら し もん のぼ たま いま たの よろこ  
慈憐なる主よ、爾は今墓より復活して、我等を死の門より升せ給へり。今アダムは楽しみ、エウは歡  
び、諸預言者は列祖と偕に絶えず爾の權柄の神聖なる能力を讃め歌ふ。

### 第七歌頌

むかしけいけん みたり しょうしゃ ほのお すず ごと われら しんせい あき ひ  
イルモス、昔敬虔なる三人の少者をハルデイの焔に涼しくせし如く、我等をも神性の明るき火に  
て輝かし給へ、吾が先祖の神よ、爾は崇め讃めらると呼べばなり。

第7歌頌

むかし 敬虔なる三人の 少者を ハルデイの焔に涼しくせし  
ごと --- く われらをも 神性の 明るき火にて  
輝かしたま --- え 我が先祖の かみよ  
爾は 崇め讃めらると 呼べば な --- り

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

造物主の十字架に釘せらるる時、殿の美しき幔は裂けて、聖書に隠れたる眞理を信者に顯せり。故に彼等呼ぶ、吾が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

ハリストスよ、爾の脅の刺されしに、爾は、定制に由りて、地に滴る生命を施す神聖なる血の点滴を以て、地より造られし者を改め造り給へり。故に彼等呼ぶ、吾が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン

### 聖三者讃詞

我等信者は善なる神を父及び獨生の子と偕に讃榮し、三位の中に惟一の元、惟一の神性を尊みて呼ばん、吾が先祖の神よ、爾は崇め讃めらる。

### 第八歌頌

イルモス、敬虔の範たる少者は堪へ難き火に入れられしに、焰に悩まされずして、神聖なる歌を歌へり、主の悉くの造物は主を崇めて、萬世に讃め揚げよ。

第8歌頌

敬虔の範たる少者は堪え難き火に入れられしに  
ほのほに悩まされずして神聖なる歌を歌えり  
主の悉くの造物は主をあげて  
世々に讃めあげよ

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

爾の十字架の髑髏の處に樹てられしに、殿の裝飾は裂かれ、造物は恐懼に由りて傾きて歌へり、主の悉くの造物は主を崇め歌ひて、世世に彼を讃め揚げよ。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

ハリストスよ、爾は墓より復活して、木に縁りて誘はれて陥りし者を神聖なる力を以て改め給へ

ゆえ かれよ い しゅ ことごと ぞうぶつ しゅ あが うた よよ かれ ほ あ  
り。故に彼呼びて云ふ、主の 悉 くの造物は主を崇め歌ひて、世々に彼を讃め揚げよ。

父と子の聖神の一なる神を讃め揚げん、今も何時も世々にアミン

### 生神女讃詞

しじょう かみ はは なんじ かみ でん い すまい およ やくひつ あらわ なんじ ぞうぶつしゅ ひとびと やわら たま  
至浄なる神の母よ、爾は神の殿、活ける居處、及び約匱と顯れたり、爾は造物主を人人と和げ給へ  
り。我等 悉 くの造物は宜しきに合ひて爾を歌ひて、萬世に崇め讃む。

◇生神女の歌、「我が靈は主を崇め」、附唱「ヘルウィムより尊く」歌う。

我が心は主を崇め、我が靈は神我が救主を悦ぶ。

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え、貞操を破らずに神ことばを生みし実の生神女  
たる爾を崇め讃む。

第2句 その婢の卑しきを願み給へり、今より萬世我を福なりと言はん、

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え……

第3句 ちから  
権能を持ち給へるものは、我が為に大なる事を為せり、

其の名は聖なり、其の憐れみは世々 彼を畏るる者に臨まん

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え……

第4句 其の肘の力を表して、心の驕れるものを散らし給へり、

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え……

第5句 権ある者を位より斥け、卑しき者を上げ、飢うる者を善に飽かせ、富める者をむなしく帰らせ  
給へり。

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え……

第6句 其の僕、イズライリを納れて、我が先祖に告げしが如く、

アウラムと其の裔を世々に憐れむ事を記憶し給へり、

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え……

### 第九歌頌

イルモス、かみ かな あらた きせき しゅ あらわ どうていじよ とぞ ととお い むけい かみ いだ  
神に適ふ新なる奇蹟や、主は顯に童貞女の閉せる戸を通り、入るときは無形の神にして、出づると  
じんたい き もの と もと まま とぞ われら くれ かみ はは い がた あが ほ  
きは人體を衣たる者となり、戸は元の儘閉せり。我等彼を神の母として、言ひ難く崇め讃む。(楽譜次ページ)

第9歌頌

かな  
かみに 適う 新たなる 奇せきや 主は 顕わに 童貞女の  
と  
閉ざせる 戸を 通 - - - り 入るときは無形のかみとして  
き  
出ずる時は人体を衣たる者とな り、戸はもとのまま  
は  
閉ざせ - - - り われら 彼を神の母として  
ほ  
言いがたく あ が - - - め - 讃 む

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

かみ ことば なんじぞうぶつしゅ き あ かみ しょぼく ため み くるしみ う いき はか ふ ししゃ  
神の言よ、爾造物主が木に擧げられ、神が諸僕の爲に身にて 苦を受け、氣息なくして墓に臥し、死者  
じごく と たま み おそ かな ゆえ われら なんじ ぜんのうしや あが ほ  
を地獄より解き給ひしを見るは畏るべき哉。故にハリストスよ、我等爾を全能者として崇め讃む。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

なんじ ししゃ はか お れつそ し きゅうかい すく いのち はな ひら ししゃ  
ハリストスよ、爾は死者として墓に置かれて、列祖を死の朽壞より救ひ、生命の花を發きて、死者  
ふっかつ ひと せい ひかり みちび しんせい ふきゅう これ き たま ゆえ われら なんじ えいざい ひかり いずみ  
を復活せしめ、人の性を光に導き、神聖なる不朽を之に衣せ給へり。故に我等爾を永在の光の泉と  
あが ほ  
して崇め讃む。

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々にアミン

### 生神女讃詞

じゅんけつ もの なんじ かみ でんおよ ほうざ あらわ しじょうもの これ い おつと なんじ うま なんじ たい  
純潔なる者よ、爾は神の殿及び寶座と現れたり、至上者は之に入り、夫なく爾より生れて、爾の體  
もん ひら ゆえ いさぎよ もの なんじ や きとう もつ しょてき すみやか わ こうてい ふく たま  
の門を啓かざりき。故に 潔き者よ、爾の息めざる祈禱を以て諸敵を 速に我が皇帝に服せしめ給へ。

→通常部分へ戻る P29

◇ 小聯禱

「主我等の神は聖なり」

【差遣詞】

# 3 調

【讃揚歌とスティヒラ】

およそいきあるものは主をほめあげよ天より主をほめ  
めあげよ至と高きにかれをほめあげよほめ歌は汝  
かみにきすそのことごとくの神使やかれを  
ほめあげよそのことごとくの軍やかれをほめあげ  
よほめ歌はなんじかみに帰す

→通常部分 P31 に戻る 【大頌栄】を歌う

【定規のトロパリ】

【重連禱、増連禱】 早課の終わり。発放詞。

## 一時課

<一時課の変更箇所は、トロパリ、コンダクのみ>

# 晩 課

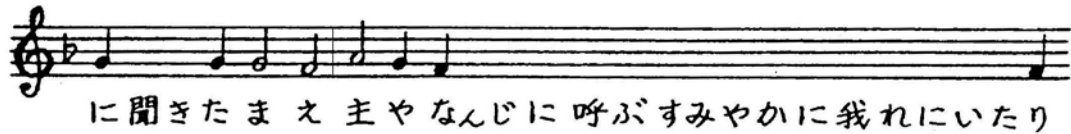
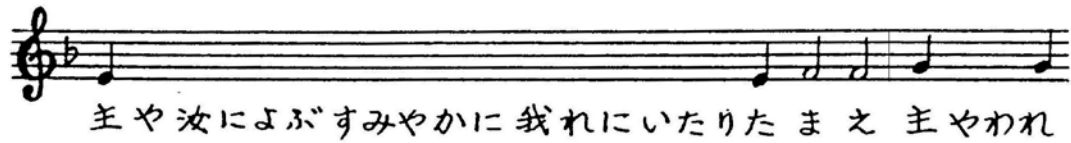
【首唱(103)聖詠】「我が霊や」、【大連禱】

【カフィズマ】第一段「悪人の謀」歌う、

【小連禱】

## 4 調

「主や、爾によぶ」 主日 第4調



句、我が霊を獄より引き出して、我に爾の名を讚榮せしめ給へ。

ハリストス神よ、我等絶えず爾が生命を施す十字架に伏拜して、爾が三日目の復活を讚榮す。蓋全能の主よ、爾は此を以て人の朽ちたる性を新にして、我等に復天に升るを賜へり、獨仁慈にして人を愛する主なればなり。

句、爾恩を我に賜はん時、義人は我を環らん。

救世主よ、爾は甘じて十字架の木の釘せられて、木の誠を犯しし罰を解けり、有能者よ、地獄に降りて、神として死の縛を断ち給へり。故に我等爾が死よりの復活に伏拜して、歡びて呼ぶ、全能の主よ、光榮は爾に歸す。

句、主よ、我深き處より爾に呼ぶ。主よ、我が聲を聞き給へ。

主よ、爾は地獄の門を破り、爾の死を以て死の國を滅し、人類を朽壞より釋きて、世界に生命と不朽と大なる憐とを賜へり。

又 讚頌、アナトリーの作。

句、願はくは爾の耳は我が禱の聲を聞き納れん。

人人よ、來りて、救世主の三日目の復活を歌はん。我等此に因りて地獄の釋き難き縛より脱れ、皆不朽と生命とを受けて呼ぶ、十字架に釘せられ、瘞られて、復活せし獨人を愛する主よ、爾の復活を以て我等を救ひ給へ。

句、主よ、若し爾不法を糾さば、主よ、孰か能く立たん。然れども爾に赦あり、人の爾の前に敬まん爲なり。

救世主よ、諸天使及び人人は爾の三日目の復活を歌ふ。此に因りて地の極は照され、我等皆敵の奴隷より脱れて呼ぶ、生を施す全能の救世主、獨人を愛する主よ、爾の復活を以て我等を救ひ給へ。

句、我主を望み、我が靈主を望み、我彼の言を待む。

ハリストス神よ、爾は銅の門を破り、柱を折きて、罪に陥りし人類を復活せしめ給へり。故に我等聲を合せて歌ふ、死より復活せし主よ、光榮は爾に歸す。

句、我が靈主を待つこと、番人の旦を待ち、番人の旦を待つより甚し。

主よ、爾が父より生ることは年歳なくして永久なり、童貞女より身を取ることは人人の爲に測り難く言ひ難し、地獄に降ることは悪魔及び其使等の爲に懼るべし。蓋爾は死を踐みて、三日目に復活して、人人に不朽と大なる憐とを賜へり。

又生神女の讚頌、アモレイのパワエルの作。第八調。

句、願はくはイズライリは主を待まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、

彼はイズライリを其悉くの不法より贖はん。

純潔なる生神女よ、爾の血より身を取りし萬有の神は爾を信者の爲には旣幪、患難急迫に在る者の爲には轉達及び扶助者、颶風に遇ふ者の爲には穩なる港と顯し給へり。故に爾凡そ爾の神聖なる旣幪の下に趨り附く者を諸の憂愁及び煩悶より救ひ給へ。

句、萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ。

至福なる女宰よ、我爾の神聖なる名を常に尊みて崇め、敬み讃めて歌はん。祈る、爾の旣幪の下に趨り附く我を諸敵の悦と爲さずして、爾の尊き祈禱の翼を以て常に我を悉くの誘惑より損はれざる者として護り給へ。

句、蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

至浄なる神の母よ、慶べ、信者の倚頼よ、慶べ、世界の潔淨よ、慶べ、爾の諸僕を諸の憂愁より脱れしむる者よ、慶べ、死を滅して生活を與ふる者よ、慶べ、慰むる者よ、慶べ、轉達者よ、慶べ、避所よ、慶べ。



光栄は父と子と聖神に帰すいまもいつも よよにアミン

生神女や汝によりて神の先祖となりし預言者ダビデは  
カミ センソ ヨゲンシヤ

汝に大いなることをなせしものになんじのことを歌いよべり  
オキ

女王は汝の右に立てりよけだし父なく汝より甘んじて人の  
ヨメ オキ

性をとりしかみえすおおいにして豊なるあわれみを  
セイ

たもつの主はなんじが母にして命のなかだちたるを表わして  
イナチ

欲にくちたるおのれのかたちをあらため山の中に  
ヨク

迷いし羊をえて肩におき父の前にたづさえおのれの旨に  
マヨ ヒツジ カタ

よりてこれを天軍にあわせて世界を救いたまえり  
テンゲン

◇「聖にして福たる」を歌う

→通常部分 (P7/8「聖にして福たる」へ戻る

【スポタのポロキメン】(6調) 第92聖詠1-5

重連祷

誦経「主や我等を守り」

増連禱

(増連禱が終わったら)

# 4 調

## 挿句のスティヒラ

### 挿句に主日の讃頌、第4調。

主よ、爾は十字架に上りて、我が原祖よりの詛を滅し、地獄に下りて、世の俘囚を釋き、人類に不朽を賜へり。故に我等歌ひて、生命と救とを施す爾の復活を崇め讃む。

又 **スティヒラ 讃頌**

句、主は王たり、彼は威嚴を衣たり。

獨有能なる主よ、爾は木に懸けられて、悉くの造物を震はせ、墓に入れられて、墓に居る者を復活せしめて、人類に不朽と生命とを賜へり。故に我等歌ひて爾の三日目の復活を崇め讃む。

句、故に世界は堅固にして動かざらん。

ハリストスよ、不法の民は恩主に對して恩を知らざる者と顯れて、爾をピラトに解して、十字架に釘せん爲に定めたり。惟爾は甘じて葬を忍び、神として己の權を以て三日目に復活して、我等に終なき生命と大なる憐とを賜へり。

句、主よ、聖徳は爾の家に屬して永遠に至らん。

女等は涙を流し墓に至りて、爾を尋ねしに、得ずして、歎き泣きて呼びて曰へり、哀しい哉我が救世主、萬有の王よ、爾如何ぞ竊まれたる、何の處か爾の生を施す身を隠す。天使は彼等に對へて曰へり、泣く勿れ、往きて傳へよ、主は復活して我等に喜を賜へり、獨仁慈の主なればなり。

光榮、今も、生神女讃詞。

至りて玷なき者よ、爾の諸僕の祈禱を顧みて、堪へ難き攻撃を我等より退け、諸の憂苦を我等より遠ざけ給へ、我等は爾を一の堅固なる恃むべき錨として有ち、爾の轉達を得たればなり。女幸よ、願はくは我等爾を呼ぶ者は耻を蒙らざらん、過に我が切なる祈を應へ給へ、蓋我等中心より爾に籲ぶ、女幸、衆人の佑助と、歡喜と、庇護と、我等の靈の拯救なる者よ、慶べ。

→通常部分 P10 「シメオンの祝文」へ戻る

「聖三祝文」「至聖三者」「天主經」

司祭 蓋 國と權能と光榮は爾父と子と聖神<sup>o</sup>に歸す、今も何時も世世に、

(詠) 「アミン」  
「生神童貞女や、慶べよ」  
「願わくは主の名は崇めほめられ……」

## 早 課

来たれ…、【六段の聖詠】【大連禱】に続いて  
＜カフィズマ、セダレンは省略＞

# 4 調

## 主は神なり、主日トロパリ

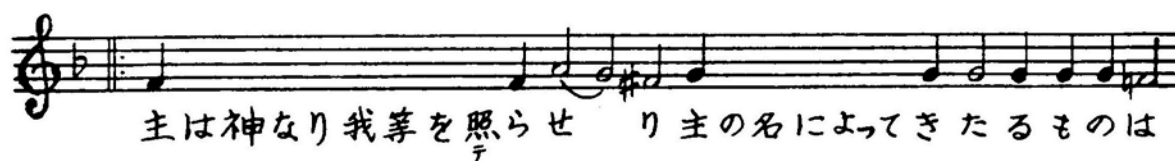
主は神なり我等を照せり、主の名に依りて来る者は崇め讃めらる、

(第1句) 主を尊み讃めよ、彼は仁慈にして其憐は世世にあればなり、

(第2句) 彼等我を囲み我を環れども、我主の名を以て之を敗れり、

(第3句) 我死せず、猶生きて主の行ふ所を伝へん、

(第4句) 工師が棄てし所の石は屋隅の首石となれり、是主のなす所にして我等の目に奇異なりとす、



→通常部分 P15 【ポリエレイ】「主の名を讃め揚げよ」

<ポリエレイ後のセダレン、ネポロチニ省略>

【復活のエフロギタリア】「主や爾は崇め讃める」

【小連禱】【アンティフォン】 4 調

# 4 調

【アンティフォン】

○品第詞、第 4 調。第一倡和詞。(毎句復唱す。)

我が 幼き時より多くの慾は我を攻む、吾が救世主よ、爾親ら我を守りて救ひ給へ。  
シオンを惡む者は主より辱を受けよ、爾等草の火に於けるが如く枯らされんとすればなり。

光

榮、(今も)

聖神にて凡の靈は活かされ、清淨を以て愈上り、三位の一體にて奥密にて照さる。

今も、同上。 以下省略

第二倡和詞

主よ、我靈の深虚より熱切に爾に籲べり、願はくは爾の神聖なる耳は我にも聴かん。凡そ主に於ける望を得たる者は悉くの憂ふる者の上に在り。

光榮

聖神にて恩寵の流は注がれ、凡の造物に飲ませて、之を活かす。

今も、同上。

第三倡和詞

言よ、願はくは我が心は爾に擧げられ、世俗の華美は一も其樂を以て我を弱めざらん。人其母に愛を保つが如く、主に對して更に篤き情を保つべし。

光榮

聖神には神を識る知識と、明悟と、睿智との富は由るなり、蓋言は彼に因りて父の悉くの命を露す。

今も、同上。

## 提綱、第 4 調

主よ、起きて我等を佑けよ、爾の憐に因りて我等を救ひ給へ。

句、「神よ我等は己の耳にて聞けり」

Zm 4調

主よ、起きて 我等を たすけ よ、  
爾の憐れみによって 我等を憐れみたまえ。

→通常部分 P20

【福音の読み】

【福音後のスティヒラ】「ハリストスの復活を見て」

輔祭 「神よ爾の大いなる憐れみによって」「主憐れめよ」12回

# 4 調 カノン

主日のカノン、第4調<第1のカノン(復活)のみ、第2(十字架復活)、第3(生神女)は省略>

第一歌頌

イルモス、<sup>いにしえ</sup>古のイスライリは<sup>あし</sup>足を濡らさずして<sup>うみ</sup>海の<sup>くれない</sup>紅の淵を<sup>わた</sup>り、<sup>の</sup>野に於て<sup>おい</sup>モイセイの<sup>じゅうじかた</sup>十字形の手にて<sup>ちから</sup>アマリク<sup>か</sup>の力に勝てり。

第1歌頌 ① ②  
いにしえのイスライリは <sup>あし</sup>足を濡らさずして  
① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ①  
<sup>くれない</sup>海の<sup>ふち</sup>紅の淵を <sup>わた</sup>り <sup>の</sup>野において <sup>おい</sup>モイセイの  
① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ① ①  
十字形の手にて <sup>ちから</sup>アマリク<sup>か</sup>の力に <sup>か</sup>勝てり

附唱、<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>こうらい</sup>光榮は<sup>なんじ</sup>爾の<sup>せい</sup>聖なる<sup>ふつかつ</sup>復活に<sup>き</sup>歸す。

<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>なんじ</sup>爾は<sup>しじょう</sup>至淨なる<sup>じゅうじか</sup>十字架の<sup>き</sup>木に<sup>あ</sup>上げられて、<sup>われら</sup>我等の<sup>だらく</sup>墮落を<sup>あらた</sup>改め、<sup>き</sup>木に<sup>よ</sup>縁る<sup>ざんがい</sup>殘害の<sup>きず</sup>傷を<sup>いや</sup>醫し<sup>たま</sup>給へり、<sup>なんじ</sup>爾は<sup>じんじ</sup>仁慈<sup>ぜんのう</sup>全能の<sup>しゅ</sup>主なればなり。

附唱、<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>こうらい</sup>光榮は<sup>なんじ</sup>爾の<sup>せい</sup>聖なる<sup>ふつかつ</sup>復活に<sup>き</sup>歸す。

<sup>かたど</sup>像り<sup>がた</sup>難き<sup>なんじ</sup>ハリストスよ、<sup>からだ</sup>爾は<sup>はか</sup>體にて<sup>あ</sup>墓に<sup>たましい</sup>在り、<sup>かみ</sup>靈にて<sup>じごく</sup>神として<sup>あ</sup>地獄に<sup>とうぞく</sup>在り、<sup>とも</sup>盜賊と<sup>らくえん</sup>偕に<sup>あ</sup>樂園に<sup>ちち</sup>在り、父

およ せいしん ととも ほうざ あ 在りて、いっさい み たま 給へり。

「光荣」「今も」 生神女讃詞

なんじ たね なく ちち むね もつ しんせい しん よりて こ はら み 身にて 生み 給へり、是れ ちち はは なくして、我等  
の爲に なんじ より ちち なくして うま たま 給ひし しゅ なり。

<十字架復活のカノン、生神女のカノンは省略>

### 第三歌頌

イルモス、ハリストスよ、爾の教會は爾の爲に樂しみて呼ぶ、主よ、爾は我が能力と避所と堡障なり。(楽譜は次ページ)

第3歌頌 ① ②

ハリ-ス ト-ス よ なん じ の 教 かい は

①

なん じ の た め に た の し み て 呼 - ぶ

③

主よ、爾は 我が ちから と 避所と かた め な り

附唱、しゅ 主よ、こうらい なんじ せい なる ふっかつ き 復活に歸す。

せいめい き しんれい まこと ぶどう じゅうじか かか して しゅうじん ふきゅう なが たま 流し給ふ。

しだい しげん じごく ごうまん たお しゅ ふきゅう かみ いまにくたい もつ ふっかつ たま 復し給へり。

「光荣」「今も」 生神女讃詞

かみ はは なんじ ひとりち お もの た め せい こ 性に超ゆる しょふく ちゅうほうしゃ な ゆえ われら なんじ よろこ べよを捧ぐ。

◇小連祷 <セダレンは省略>

### 第四歌頌

イルモス、きょうかい なんじ ぎ ひ じゅうじか あ 見、なら た ちて ただ よ 並び立ちて 正しく呼べり、主よ、こうらい なんじ 力に歸す。

第4歌頌 ① ② ③ 三十一字

教 かい は なんじ 義 の 日 が 十 字 架 に  
 挙 げ ら れ し を 見 て ならび 立 ち て 正 しく 呼 べ り  
 主 よ 光 榮 は なんじ の ち から に 帰 す

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

爾は十字架に升りて、甘じて衣たる爾の至淨なる肉體の苦を以て我が苦を醫し給ふ。故に我等爾に呼ぶ、主よ、光榮は爾の力に歸す。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

主宰よ、死は爾の罪なくして生を施す身を呑みて、宜しきに合ひて殺されたり。故に我等爾に呼ぶ、主よ、光榮は爾の力に歸す。

「光榮」「今も」 生神女讚詞

童貞女よ、爾は婚姻に與らずして生めり、生みし後にも亦童貞女と現れ給へり。故に我等疑なき信を以て黙さざる聲にて爾に呼ぶ、女宰よ、慶べ。

第五歌頌

イルモス、我が主よ、爾は光、信じて爾を崇め歌ふ者を聞き無智より引き出す聖なる光にして、世界に來り給へり。

第5歌頌 ① ③

我 が 主 よ なんじ は ひ か り 信 じ て 爾 を 崇 め 歌 う も の を  
 聞 き 無 知 より 引 き い だ す 聖 な る ひ か り に し て  
 世 界 に 來 た り た ま え り

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

主よ、爾は慈憐に由りて地に降り、爾は木に擧げられて陥りし人の性を擧げ給へり。

ハリストスよ、爾は我が罪に因る罰を負ひ給へり、宏恩の主よ、爾は神聖なる爾の復活を以て死の疾を除き給へり。

「光荣」「今も」 生神女讃詞

神の聘女よ、我等爾を敵に對して勝たれぬ武器として有つ、我等爾を堅固及び我が救の冀望として得たり。

### 第六歌頌

イルモス、憐に由りて爾の脅より流れし血にて悪魔の祭の血より浄められし教會は爾に呼ぶ、主よ、讃揚の聲を以て爾を祭らん。

第6歌頌 ① ②  
憐れみによりて 爾の脇より流れし 血にて  
①  
悪魔の祭の血より 浄められし 教かい は  
② ③  
なんじに 呼ぶ 主よ、讃め揚げの 声を以て なんじを祭らん

附唱、主よ、光荣は爾の聖なる復活に歸す。

爾は十字架に上り、力を帯びて、暴虐者と戦ひ、神として之を高きより墜し、勝たれぬ力を以てアダムの復活せしめ給へり。

附唱、主よ、光荣は爾の聖なる復活に歸す。

ハリストスよ、爾は美しく輝きて墓より復活して、爾の神聖なる力を以て諸敵を散らし、神として衆を樂に充て給へり。

「光荣」「今も」 生神女讃詞

嗚呼諸奇跡に超ゆる新なる奇跡や、童貞女は夫を識らずして胎内に萬有を保つ主を孕みて、狭からざりき。

◇小連禱

### 小讃詞、第四調。

我が救世主及び贖罪主は神として地に生れし者を桎梏より釋きて、墓より復活せしめ、地獄の門を破り



て、<sup>しゅさい</sup>主宰として<sup>みっかめ</sup>三日目に<sup>ふっかつ</sup>復活し<sup>たま</sup>給へり。

<同讃詞 省略>

### 第七歌頌

イルモス、アウラアムの<sup>しょうしやう</sup>少者は<sup>いっしや</sup>ペルシヤの<sup>いろり</sup>爐に在りて、<sup>ほのお</sup>焰よりも<sup>けいけん</sup>強く<sup>あがめ</sup>敬虔の<sup>あがめ</sup>愛に<sup>や</sup>熱かれて<sup>よ</sup>呼べり、<sup>しゅ</sup>主よ<sup>なんじ</sup>爾が<sup>こうえい</sup>光榮の<sup>でん</sup>殿に於て<sup>あがめ</sup>爾は<sup>ほ</sup>崇め<sup>ほ</sup>讃めらる。

第7歌頌 ①

アウラアムの少者は ペルシヤの 爐にありて  
ほのお 焰よりも つよく 敬虔の愛に 焼かれて呼べり  
① 主よ、爾が光榮の 殿において なんじは あがめ 讃めらる

**附唱、**<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>こうえい</sup>光榮は<sup>なんじ</sup>爾の<sup>せい</sup>聖なる<sup>ふっかつ</sup>復活に<sup>き</sup>歸す。

ハリストスの<sup>しんせい</sup>神聖なる<sup>ち</sup>血を<sup>もつ</sup>以て<sup>あら</sup>洗はれて<sup>ふきゆう</sup>不朽に<sup>め</sup>召されたる<sup>じんるい</sup>人類は<sup>かんしゃ</sup>感謝して<sup>うた</sup>歌ふ、<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>なんじ</sup>爾が<sup>こうえい</sup>光榮の<sup>でん</sup>殿に於て<sup>あがめ</sup>爾は<sup>ほ</sup>崇め<sup>ほ</sup>讃めらる。

**附唱、**<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>こうえい</sup>光榮は<sup>なんじ</sup>爾の<sup>せい</sup>聖なる<sup>ふっかつ</sup>復活に<sup>き</sup>歸す。

ハリストスよ、<sup>われら</sup>我等の<sup>ふっかつ</sup>復活の<sup>みなもと</sup>源たる<sup>なんじ</sup>爾の<sup>はか</sup>墓は、<sup>いのち</sup>生命を<sup>ほどこ</sup>施す者、<sup>じどう</sup>地堂より<sup>うるわ</sup>美しき者、<sup>もの</sup>實に<sup>じつ</sup>凡の<sup>およそ</sup>王の<sup>みや</sup>宮よりも<sup>ひか</sup>光れる者として<sup>あらわ</sup>現れたり。

「光榮」「今も」 **生神女讃詞**

<sup>しじょうしや</sup>至上者の<sup>せい</sup>聖にせられたる<sup>しんみやう</sup>神妙の<sup>すまい</sup>居處よ、<sup>よろこ</sup>慶べ、<sup>けだししやうしんじよ</sup>蓋生神女よ、<sup>なんじ</sup>爾に<sup>よ</sup>縁りて<sup>よろこび</sup>欣喜は<sup>か</sup>斯く<sup>よ</sup>呼ぶ者<sup>もの</sup>に<sup>たま</sup>賜はりたり、<sup>いた</sup>至りて<sup>むてん</sup>無玷なる<sup>じよさい</sup>女幸よ、<sup>なんじ</sup>爾は<sup>おんな</sup>女の中に<sup>うち</sup>祝福<sup>しゅくふく</sup>せられたり。

### 第八歌頌

イルモス、<sup>しし</sup>ダニイルは<sup>あな</sup>獅子穴に在りて<sup>て</sup>手を伸べて、<sup>しし</sup>獅子の<sup>くち</sup>口を<sup>とざ</sup>閉し、<sup>けいけん</sup>敬虔の<sup>あがめ</sup>篤き<sup>しょうしやう</sup>少者は<sup>あがめ</sup>徳を<sup>ほ</sup>帯び、<sup>ひ</sup>火の<sup>ちから</sup>力を<sup>け</sup>滅して<sup>よ</sup>呼べり、<sup>しゅ</sup>主の<sup>しんぞう</sup>悉くの<sup>しゅ</sup>造物は<sup>あがめ</sup>主を<sup>ほ</sup>崇め<sup>ほ</sup>讃めよ。

第8歌頌 ① ②

ダニイルは獅子穴にありて獅子のくちを閉ざし  
 敬虔の篤き少者は徳を帯び火の力を消して呼べり  
 主の悉くの造ぶつは主をあがめ讃めよ

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

主宰よ、爾は十字架に手を伸べて萬民を集め、爾を讃頌する唯一の教會を顯して、在地在天に同心に歌はしむ、主の悉くの造物は主を崇め、彼を歌ひて世世に讃め揚げよ。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

白衣にして復活の近づき難き光に輝ける天使は女等に現れて呼べり、何ぞ生ける者を死者の如く墓に尋ぬる、ハリストスは實に興きたり、我等彼に呼ばん、悉くの造物は主を歌ひて萬世に讃め揚げよ。

「父と子と聖神の一なる神を讃め揚げん、今も・・・」 生神女讃詞

至淨なる童貞女よ、爾は獨萬族の中に神の母と現れたり、純潔なる者よ、爾は神性の居處と爲りて、近づき難き光の火に焚かれざりき。故に神の聘女マリヤよ、我等皆爾を崇め讃む。

#### ◇生神女の歌

我が心は主を崇め、我が靈は神我が教主を悦ぶ。

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく榮え、貞操を破らずに神ことばを生みし実の生神女たる爾を崇め讃む。

第2句 その婢の卑しきを顧み給へり、今より萬世我を福なりと言はん、

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく榮え……

第3句 権能を持ち給へるものは、我が為に大なる事を為せり、其の名は聖なり、其の憐れみは世世彼を畏るる者に臨まん

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく榮え……

第4句 其の肘の力を表して、心の驕れるものを散らし給へり、

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく榮え……

第5句 権ある者を位より斥け、卑しき者を上げ、飢うる者を善に飽かせ、富める者をむなしく帰らせ給へり。

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく榮え……

第6句 其の僕、イズライリを納れて、我が先祖に告げしが如く、アウラアムと其の裔を世世に憐れむ

事を記憶し給へり、

(附唱) ヘルビムより尊く、セラフィムに並びなく栄え……

### 第九歌頌

イルモス、童貞女よ、手にて斫られざる隅石ハリストスは、爾斫られざる山より斫り分けられて、離れたる性を合せ給へり。故に我等楽しみて、爾生神女を崇め歌ふ。



第九歌頌 ① ②  
童貞女よ、手にて斫られざる隅石ハリストスは  
① 爾斫られざる山より斫り分けられて  
② 離れたる性を合わせたまえりゆえにわれら  
① 楽しみてなんじ生神女を崇めうたう

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

我が神よ、爾は全き神性を以て混淆せざる合一に於て全き我を受けて、多くの慈憐に由りて身に十字架に忍びたる爾の苦しみを以て全き我に救を賜へり。

附唱、主よ、光榮は爾の聖なる復活に歸す。

爾の門徒は爾の墓の啓かれ、爾の復活に由りて神の身を裹みし布の空しくなりたるを見て、天使と偕に呼べり、主は實に興き給へり。

「光榮」「今も」

### 聖三者讚詞

我等衆信者は神性の唯一にして三位なる神に伏拜して、混淆せざる位に於て同能同尊なる父、子、聖神を尊みて、崇め讚む。

→通常部分へ戻る P29

◇ 小聯禱

「主我等の神は聖なり」

【差遣詞】

# 4 調

【讃揚歌とスティヒラ】

およそいきあるものは主をほめあげよ 天より主を  
ほめあげよ いとたかきにかれをほめあげよ  
ほめ歌は汝 かみに帰す そのことごとくの神使や  
かれをほめあげよ そのことごとくの軍やかれをほめ  
あげよ ほめ歌はなんじかみに帰す

→通常部分 P31 に戻る 【大頌栄】を歌う

【定規のトロパリ】

【重連祷、増連祷】 早課の終わり。発放詞。

## 一時課

<一時課の変更箇所は、トロパリ、コンダクのみ>